空中楼閣
ー未知の国ブータンでの旅行と経験ー

J．C．ホワイト
翻訳　月原敏博（大阪市立大学文学部）　古川彰（愛知県立大学文学部）

本稿は、John Claude White, C.I.E., Castles in the air: experiences and journeys in unknown Bhutan, National Geographic Magazine, vol.XXV, no.4, 1914, pp.365-455.の全訳である。この旅行記録は、のちに初代ブータン国王となるウゲン・ワンチュックに勲章を授与するために、著者のホワイトがブータンを訪れた際のものである。原著には、踏査ルートを示すブータンの概略図と、著者自身が撮影したという72枚もの写真が添えられている。その写真はたいへん美しく貴重なものであるが、ここでは省略した。ただし、写真に付された説明文には本文にはない内容も含まれるので、本文の後に一括して訳しておいた。なお、文中、語句の後ろに（　）を付けて記したのは、その語句の原文での綴りと訳者による語句の説明である。

たいへん幸運なことに、私は、これまで未知のブータンという土着民の国を探検するための例外的な便宜を得ることができた。ブータンは、カルカッタの北東約250マイル（400キロメートル）にあって、ヒマラヤ山脈の真ん中、その南斜面に位置している。

もともと統治しにくい荒々しい国であったが、現統治者である国王ウゲン・ワンチュック卿（Sir Ugyen Wang-chuk, K.C.S.I., K.C.I.E., 訳注１）の強い資質と良好な政府により、長年にわたって英国の領土には侵入していない。前任者で友人のポール氏（Mr. A.W.Paul）によって始められた文通によって、私はウゲン卿との親密な交際を続けてきた。ウゲン卿と初めて会ったのは、ラサ遠征の時、チュンビ渓谷（Chumbi Valley）においてであったが、その後、われわれの関係は互いに堅い友情を感じるほどに発展していた。

彼は、ぜひ彼の国を訪問してほしいと招待状をよこしていたのだが、しばらくして私の訪問が実現可能になると、最大限の手助けをしてくれた。結果として、私はいろいろな地方へ旅行して興味深い多くの事物や知識を収集することができたが、彼の手助けなしには、その旅行や情報収集は不可能だったに違いない。ウゲン卿、彼の顧問官たち、デプ・ラジャ（Deb Raja、当時のブータンの為政者、摂政）、そしてすべてのラマ僧すなわち修行僧たちは、一致協力して、私の訪問がもっとも興味深く、また楽しいものとなるようにとりはからってくれ、まるで私を王様のように接待してくれた。

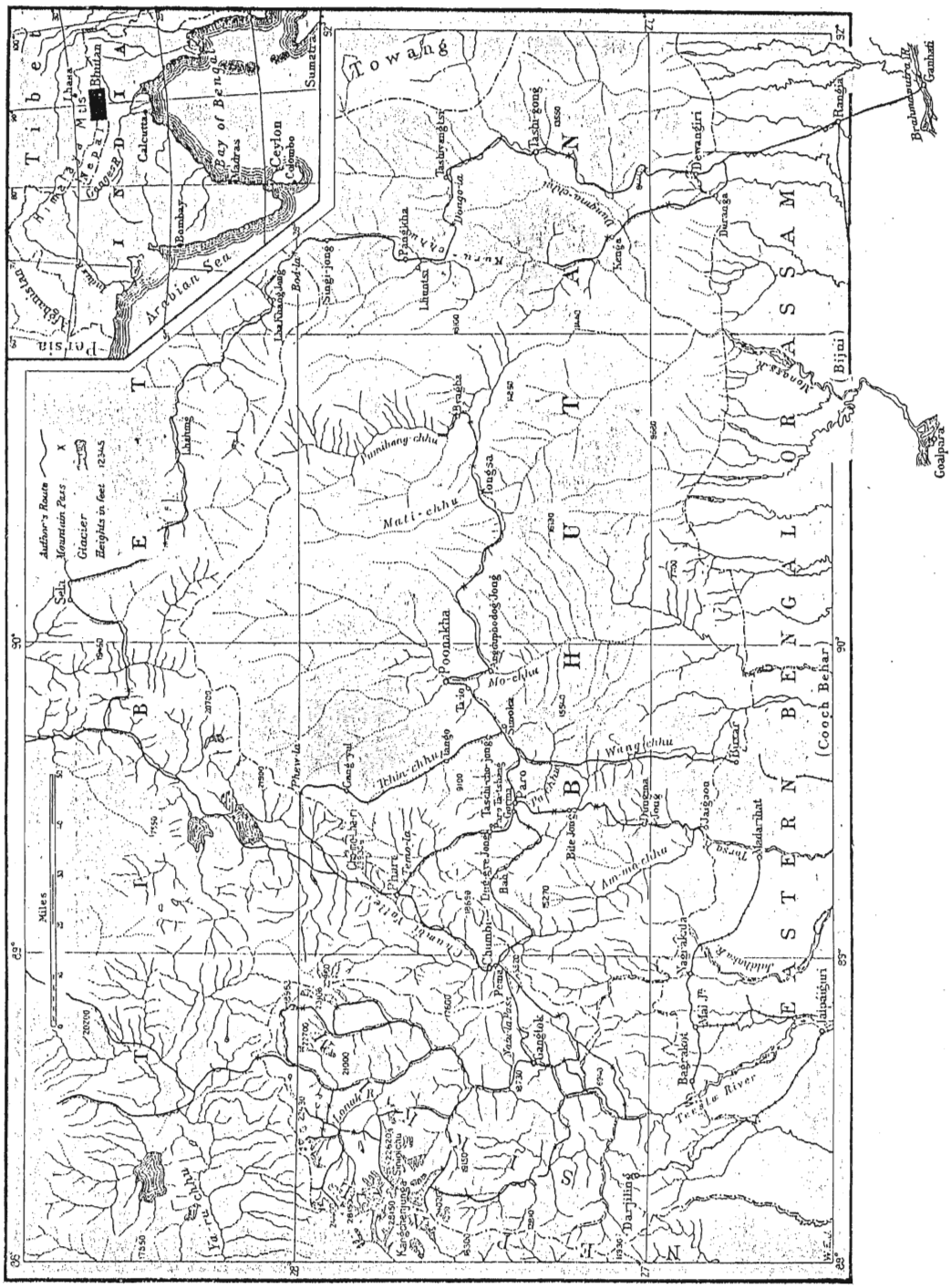
荘厳な雪峰の雄大さ、数多くの素晴らしいゾン（Jong、行政府と僧院を兼ねた城塞）などの建築物の、絵に描いたような美しさと魅力。こうした、私が旅行中に出会った景色の素晴らしさ、多様さを表現するのに適当な言葉は見つからない。しかし、私の撮った写真から読者がいくらかでもその印象を得ることができれば幸いである。

素敵な民族

ブータン人は、健康で、背が高く、体格の良い人々で、親切で誠実そうな顔つきをしている。女たちは、端正かつ清潔で、よい服装を着ており、優れた家政婦や管理人でもある。彼らの宗教は仏教で、言語はチベット語の方言である。人口は約400,000人である。

私が経験したところでは、人々は、例外なく礼儀正しく、丁寧で、清潔である。この国での滞在中、私はたった一人の酔っぱらいを見ただけだった。この国のあらゆる地方で数多くの家や寺院に入ったが、どれも清潔で整然としていた。多くの

QUTLINE MAP OF BHUTAN, SHOWING JORNEYS BY JOHN CLAUDE WHITE



家では、床はよく洗われ、磨きあげられていた。そして、彼らが親切に勧めてくれる茶や菓子は、汚れのない清潔な皿に盛られていた。

上級の役人たちの着物は常に清潔で、その錦や絹は新しく、とにかく汚れのないものであった。クーリー（人夫）たちでさえも、通常のチベットやダージリンのクーリーたちとは非常な相違を示していた。

灌漑用水路に費やされる相当な労働量を見ると、彼らが勤勉で器用な人々であることがわかる。彼らの家はすべて大きくてがっしりと造られている。

家の中庭では、家来たちが様々な職務に忙しそうに従事しており、一方その家の婦人たちは、日常の仕事に加えて、糸を紡いだり織物を織ったり、男たちの着物を縫ったりしていた。国土のうちかなりの部分は耕作されており、国庫にとって相当な負担となっているラマ僧たちを含め、全国民を扶養するのに十分な収穫をあげていた。

男たちは陽気で快活であり、一日の行程が終わってわれわれが野営地に落ち着くと、きまって輪投げなどのゲームをする準備ができていた。一つの的を弓で射たり、飛び上がって的に当てるものなどであった。彼らは土着のビールを好んだが、それが大きな害を及ぼすことはなかった。なにより、彼らが荷物を担いで苦労して山を登った後には、喉が乾いてビールを好むのは自然なことだった。私自身は、チューンガ（choonga）という竹筒のコップになみなみと注いだ口当たりの良いエールビール（ale）を何度も飲んだが、それで調子が悪くなるようなことはなかった。

ブータンはどのような国か

ブータンは、北緯26度30分と28度30分の間、東経88度45分と92度15分の間に位置する。この国は、南は英領インドと国境を分かち、東はチベットに従属する土着民の国であるタワン（Tawang）、北はチベット、西はシッキムと英領ダージリン地区に接している。

その山系は、単純化していえば、標高24,000から25,000フィート（7,300から7,600メートル）に達するピークをもつヒマラヤ山脈の主嶺から、おおよそ南の方向に平行して走る多数の尾根からなっている。主な河川は、アモ・チュー（Am-mo-chu）、ワン・チュー（Wang-chu）、モ・チュー（Mo-chu）、および、クル（Kuru）もしくはロータク・チュー（Lobrak-chu）である。

気候は、高所の氷雪から深い谷間のひどく湿っぽい酷暑に至るまで、相当な変化に富んでいる。植生でいえば、周囲を雪峰に囲まれた高地の素晴らしい放牧地の高山植物から、背の高いマツ林、シャクナゲ、モクレン、クリ、カシ・シイノキなどを経て、熱帯の、ヤシ、シダ、タケなどの繁茂へと変化する。

第2回目の旅行では、マグネシウム石灰石（magnesium limestone）の丘陵上でアツモリソウ（Cypripedium fairianum）の大群生地に出くわした。この植物は、1860年頃、ジョセフ・フッカー卿（Sir Joseph Hooker）の委託によりシッキムから英国に届けられた荷物に含まれていた標本の一つであったが、その後英国内では絶滅したため、栽培家たちが5,000ドルを支払うと申し出たランの花（orchid）なのである。私は、長年の間それを発見したいと思っていて、まさしくそれを発見したわけだったが、時すでに遅く、アモ・チュー渓谷で数カ月前に行われた調査で発見されていた。

ブータンにはマツ（Pinus excelsa）、モミ（Abies brunoniana）、ヨーロッパモミ（silver fir）などの壮大な森林があるが、多くの樹々は私が今までに見たことがないほどの立派な大木に育っていた。もし、周囲で得られる水力をうまく利用してこの森林を開発・経営することができれば、ここからインドのすべての茶の産地に木箱を供給できるに違いない。そして、そうなればブータンが必要とする歳入の一部は直ちに賄えるだろう。ただし、その際ヨーロッパ人が資本を提供して監督することが絶対に必要で、そうでなければ森林は荒廃するだろう。

東部ブータンでは、山地部は濃密な森林に覆われており、事実上人は住んでない。熱病があまりに蔓延しているために人が居住できないのである。そのかわりに、そこにはほとんどあらゆる種類の野生動物が棲んでいる。すなわちゾウ、サイ、トラ、ヒョウ、野牛（bison）、ミトゥン（mythun）、サンバー（sambur、三叉の角をもつ大鹿）、チーター、アクシスジカ（hog deer）、ホエジカ（barking deer）等である。動物の群れは河床部で頻繁に見られる。山地の中には、所々、動物が塩

分のある土を舐めに来る場所があるのだが、そこへ向かって移動する動物の群れは、河床部を通路にしているからだ。

この地域を訪れたとき、一度、巨大な牙をもつゾウ（tusker）が私とウゲン・カジ（Ugyen Kazi、訳注２）の前方の谷を登って行った。ウゲン・カジはその谷の上方に幕営していたが、野生ゾウ（wild elephant）の数が多いので気味が悪くなり、テントを移動した。

ある石炭の鉱床を私が調査していた時、大きな雌のトラが子供と一緒に谷をおりていった。帰り道で私はその足跡を見つけたが、親の足跡の内側には子供の小さな足跡もあった。この地域はハンティングには理想的な場所の一つだが、砂岩の崖が非常に険しいため、獲物を追うことは容易ではない。野生ゾウはほとんど何処でも登り降りすることができる。私が先に見たといった巨大な牙をもつゾウは、ほとんど垂直に近い傾斜の断崖をちょうど30フィート（９メートル）ほど登っていった。

一夜のうちに固く凍りついた激流

第２回目の旅行は、高所での天候が如何にひどいものかを経験することから始まった。というのも、12月の始めにチュンビ（Chumbi）を出発したときに、われわれは例外的にひどい吹雪に出くわしたからである。みるみるうちに風はまさにハリケーンとなり、気温は華氏零下26度（摂氏零下32度）にまで下がった。宿泊地の近くにザーザーと音をたてている急流があり、その音のせいでわれわれは最初は眠ることができなかった。ところが、寒気が増すにつれて音はしだいに静かになり、朝になってみると、その急流は固く凍りついていた。

ひき続き私はゴウツァ（Goutsa）と呼ばれる所の小さなバンガローへと進んだが、そこではすべてのものが固く凍りつき、茶やミルクでさえも凍っていた。しかし、なんとか火を起こすことができ、いくらかでも嵐から身を守ることができた。一方、私の一行のうちの２人は、「シャウ」（Shau、Cervus sinencis）と呼ばれる野生鹿についてのうわさを聞いていたので、それを撃ちたいと望んで野営した。その雄は巨大な頭を持つと報告されている。私は、長さが64インチ（163センチ）もある枝角を持った標本を見たことがあるが、たしかにそれは狩猟記念品として追い求めるだけの値打ちがあるものだった。苦労したにもかかわらず２人は獲物を全然見つけられなかったが、次の日に無事帰ってきて、何事もなかったことに私はたいへん安堵したのだった。

翌朝は、さんさんと日がふりそそぐ好天で、われわれはパリ（Phari）へと進んだ。そこにはチベット人が建てた城塞があるが、風雨に晒された、古くて立派なもので、チベット軍人（Tibetan military official）でもあるゾンペン（jongpen、城長たる県知事、地方司令官）の本拠となっていた。街は非常に汚く、その意味では私が訪れたところでは最悪の場所であった。住民もまた不潔であった。とはいえ、15,000フィート(4,600メートル）を超えるような高所で、しかも刺すような匂いの煙を出すヤクの糞以外に燃料がないような気候条件のもとでは、清潔さを保つのは困難なことである。

われわれは、素晴らしい好天のもとテモ・ラ（Temo-la、16,500フィート、5,030メートル）を越え、ついにブータンに入った。そして、素晴らしい景色の中を進み、急流を何度もわたって、マツ林に囲まれる場所へと至った。

ドゥゲ・ゾンの城塞

われわれが訪れた最初の興味深い場所は、チベット人の襲撃からこのルートを守るために建てられた城塞、ドゥゲ・ゾン（Dug-gye Jong）であった。このゾンは、渓谷の中ほどに迫り出した尾根の上にあって、谷の両側には高い雪峰が聳え、素晴らしい景色の中に堂々と立っている。ここのゾン・ペン（jongpen）すなわち司令官（general）は、われわれのために華やかな馬具飾りをつけたラバをよこしてくれた。

私は、120年前にここを訪れたターナー大尉（Captain Turner）以上にうまくドゥゲを描写することはできない。その景色は最近になってもほとんど変化していないと思われる。彼は次のように記している。

「唯一の入り口への接近路は、３つの丸い塔によって防御されている。その丸い塔は丘の麓と城との間に建っているが、二重の壁をもつ通路によって互いにつながっている。そのため、もっとも危険な状態にさらされた時でも相互に安全な行き

来が保たれている。これらの丸い塔には、どれも、屋根に近い高さのところに壁から外に突き出た幅広い棚があるが、その突端は、弓矢やマスケット銃（musket）を使うための銃眼のあいた土壁で固められている。城の北側にはチベットからの道を見下ろす丸い塔が2つある。東側は切り立った崖で、凹凸のある岩が露出している。西側の城壁の下には大きなため池がある。それは、私がブータンで見た唯一の貯水池であった。」

「ドゥゲ・ゾンの城塞は、高い城壁をもつたいへんしっかりした石造建築物である。しかし、それはあまりに不規則な形をしているので、何らかの設計図に従ったというより、城の立つ丘の頂上の平坦部全体を覆うように建てられた結果、このようなかたちになったと思われる。城壁の下にある入り口の門へと上ってみると、そこからさらに狭い通路を通って12段ほどの階段を登らねばならなかった。そうして、銃眼をうがった強固な壁で縁取られた半円形の踊り場に着く。右へ曲がって第2の門を通り抜けると、両側に馬の厩舎がある広い通路となり、そこを進んだ。第3の門を抜けると、城の中庭に入った。そこは大きな四角形の広場で隅には3つの部屋があった。四角い広場の中央には寺院があり、マハームーニー（Mahamoonie）とその従者の偶像が祭られていた。」

城の内部はどこも非常に清潔であった。トンサ・ペンロップ（Tongsa Penlop、ペンロップは県知事よりも上位の地方統治者）であるウゲン卿（Sir Ugyen）に任命されたゾンペンは、ウゲン卿に随行してラサ（Lhasa）に行った経験を持つ忠実なしもべであったが、われわれを心から歓迎してブータン式の昼食で歓待してくれた。その昼食は、炒り卵とサフランで色つけした香りのよいご飯だったが、飲み物として、やはりサフランで色つけしたマルワ（murwah）とよばれる（シコクビエの）ビールや、チャン（chang）と呼ばれる強い酒、新鮮なミルクが出され、デザートにはクルミとドライフルーツが添えられた。食事を用意した彼の妻は、私がブータンで会った女性の中ではもっとも清潔で容貌の美しい女性の一人であった。そして、彼女の小さな男の子は父親の着物を正確に縮小コピーした着物を着ていたが、感じのよい子であった。

ドゥゲの兵器類は、この国では最上級のものらしいが、大きな張り出し窓がある美しい部屋に収められている。窓は南に面し、そこから谷を見おろせるが、トンサ・ペンロップの意見ではブータンの中で最高のバルコニーだとのことである。

外側の広場では男たちが火薬を作っていた。また、銀細工師やろくろ師も仕事をしており、内側の広場では城の屋根の葺き替えに使う割板が積み上げられていた。屋根全体は5年ごとに葺き替えられるという。そこには、まるで、一緒に忙しく働くのは楽しいことであるというような雰囲気があった。

断崖の上に建てられた僧院

われわれはゾンペンの賓客として2日間滞在して、有名なパロのタクツァン僧院（Paro Tatshang）を訪れた。その僧院は、谷の対岸の約3,000フィート（900メートル）上方に位置していた。道は非常に悪いだろうと聞かされたが、たしかに非常に悪い道であった。そして、ゾンペンから全員のためにラバを借りることができ、喜ばしいことに私自身の動物をつれて行かずに済んだ。尾根の頂上までの道は非常に険しく、日陰になっているところでは凍りついて滑り易い所があちらこちら継ぎはぎのようにあった。そのくせ、日の当たる所は非常に暑かった。あるところでは道は断崖を横切る狭い道となっており、別のところでは急な石段の連続となっていた。

尾根の頂上に立つと、真っ先に目に入ったのは僧院の建物だった。それはほとんど垂直に近い崖の中腹にまるで絵に描いたように建てられたひと塊の建物群であった。本堂は、2,000フィート（600メートル）を越える高さの垂直な岩の裂け目に直立して建っていたが、実際どのようにして建てられたのであろうかと思われるほどのものであった。また、岩の裂け目に沿っていくつかの補助的な建物が建っていた。

それぞれの建物は、ブータンのすべての僧院がそうであるように2階建てになっていて色が塗られていた。下の階の部分は鈍いネズミ色に光り、上の階の部分は茜色で帯状に塗られており、板葺きの屋根の上部には銅箔の天蓋がかぶせてあった。私が今までに見た中では疑いなくもっとも絵に描いた様な建物群であった。周囲の風景の中に

ある自然的要素のすべてが見事に取り込まれていて、たとえば岩にしがみついたように生える老木はちょうど建物の右側にあって、垂直に立っている断崖とともに壮大な絵を作っている。

われわれはすでに僧院のすぐそばまで来たように思っていたが、その先にはほとんど近寄ることができないような岩の凹角があって、僧院の建物とわれわれを隔てていた。唯一の通路は一繋がりの石段を下る狭い道で、そこは一歩踏み外せば1,000フィート（300メートル）も下の断崖の底にまっ逆さまに転落してしまうと思われる所であった。そこから先は分厚い板でできた橋を渡り、さらに岩を削りとって作ったもう一つの石段を登らなければならなかった。われわれに同行していた現地人のアシスタントがいたが、この通路は彼には荷が重すぎた。彼は「今まで何度もひどい所を通ったことはあるが、これほどのところに来たことはない」と言って、ラバが待機している所まで引き返した。一般に、この国の人々はよい判断力を持っていて悪い道を行くことを恐れはしないのだが、このように語ったこと自体、いかにこの道が悪いものであるかを雄弁に物語っている。

狭い岩の凹角をまたぐように、色のついた小さな経文旗の綱が一本張り渡されていた。この旗が風にたなびくと、それを掲げた人のご利益を願うお祈りをすることになるのだというが、この経文旗も、ここの風景を絵のように見せていた。

われわれが梯子の様な道を登りきった時、一人の修行僧が神聖な泉から汲んで瓢箪に入れていた氷水をわれわれ全員に与えてくれた。これが暑い日のことならたいへんありがたいのだがと私は思った。

もっとも神聖な祠は洞穴の中にあり、他の建物は、その聖域を取り囲むように建ち並んでいた。洞穴はさほど大きいものではなく、その中には金箔の仏塔があった。仏塔の中には小さな銅箔の仏陀像が一杯入っていたが、蓮の花の上に仏陀が座ったたいへん良いデザインのものがたくさんあった。その他の建物はおおよそ普通の僧院と同じで、壁画が描かれた壁と祭壇があり、バター・ランプや線香がともっていた。中心になる建物には、等身大よりも大きい真鍮製の非常に立派な仏陀の像があり、仏陀の従者たちがそのまわりを取り囲んでいた。また、礼拝に用いられる、非常に立派なドルジ（dorje、金剛杵）やプルバ（purpa、金剛けつ）があった。

これらの仏具は神聖なものであり、仏塔の近くの硬い岩の間から発見されたものらしかった。ジャカ・ゾンペン（Bya-gha Jongpen）の息子、つまりトンサ・ペンロップの甥がほんの数週間前にそれを一つ手に入れたとのことであったが、私がそれを見ることはできなかった。私の従者たちはこの宝物をぜひとも一つ手に入れたいと熱望して困難な岩をいくつもよじ登ったが、発見には至らなかった。

岩の凹角の真ん中には小さな岩棚があって、その上に行者が瞑想する小屋があった。そこへ上がる唯一の方法は、約40フィート（12メートル）もの高さがある垂直の柱を、刻み目に頼ってよじ登ることであった。この瞑想所は壮大な断崖と比べると非常に小さく見え、長いつららが屋根から垂れ下がった景色はもの寂しく気乗りしなかったので、われわれはそこに上がろうとはしなかった。しかし、われわれは断崖の頂上まで登ってサントクペリ（Sang-tog-peri）の僧院を訪れた。その僧院は突き出た尾根の上に絵の様に建てられており、古い立派なナラの木（oak）が入り口の上に覆いかぶさっていた。この景色を見て私は日本の京都にある寺を思い出した。自然の美しさをうまく利用して入り口を装飾していたからである。

この場所から見た景色は美しいものであった。われわれの周囲には突き出した尾根がいくつもあり、他の僧院と尼僧院はそれらの尾根のうえに散らばっていた。ただし、接近路にはそれぞれ多かれ少なかれ困難があり、われわれはこれ以上時間を遅らせることはできなかった。そのため、これらの僧院を訪れることなく帰途につかねばならなかった。この僧院群を踏査するには数日を要するであろうが、もしこれを行うならその困難に対して十分な報いが得られるであろう。特に美と常ならぬものを探求する芸術家にとってはそうだろうと思う。

ラバに卵を食べさせる

ドゥゲ（Dug-gye）からパロ（Paro）へのルートは渓谷を下る道である。谷の中から見ていると、目立った丘のうえには必ずとまり木にとまったように僧院が建っているのがわかる。パロに到着す

ると、われわれはいつものようにテントを張る準備のできた野営地を見つけた。

午後になって、上手に配置されたその野営地の周りをブラブラ歩いていると、ラバに卵を食べさせている光景に出くわした。それは、他所では一度も見たことのない、ブータン人の奇妙な風習であった。われわれのラバのほか、ウゲン・カジ（Ugyen Kazi）やゾンペンが所有するラバは、すべて1頭あたり2～3個の生卵を与えられていた。角で作ったカップの中に卵を割り、ラバの頭を持ち上げて、角のカップの中身を喉に注ぎ込んでやるのである。奇妙なことに、動物たちはこの不自然な食物を好んでいるように見えた。ブータン人は、動物を酷使するときにはいつもこうして卵を与えている。そして、これを食べれば動物たちの健康状態を良好に保つことができるという。たしかに、彼らのラバはどれも最高の健康状態にあった。

パロ・ゾンは大きく目立つ建物である。この建物の一方はパ・チュー川（Pa-chu）で守られており、梁構造のしっかりした、木材を保護する屋根がついた橋が川に架けられていた。ゾンの唯一の入り口は丘の側にあるが、それは3階部分のうえになっており、それより下の階は全部穀物類の倉庫として使用されていた。

ブータンのゾンの中で

われわれは、重たい跳ね橋を辿って城塞と外庭を分かつ深い壕を渡り、巨大な入り口の門を通り抜けて東の中庭に出た。その中央には高さの同じ小さな城郭が2つあり、下級官吏の役所となっていた。東側と北側の外壁の内側には部屋とベランダが続いており、川を見下ろせるようになっていた。西側部分のほとんどは高さが1階分の覆いのついたベランダとなっていた。

ペンロップ（Penlop、県知事よりも上位の地方統治者）の部屋は上の階の南東角に位置していた。われわれは長くて天井の低い部屋を通ったが、この部屋には家来たちが大勢おり、2列ずつ内側を向くかたちで4列になって座っていた。この光景は、過ぎ去りし英国の古い貴族風の大広間を思わせるものであった。さらに印象を付け加えておくと、応接室は大きく、美しく飾られていて、その壁にはあらゆる種類の兵器が吊り下げられていた。想像しうる限りの楯、槍、火縄銃、大砲、弓矢などがあったが、すべてがよく手入れされており、すぐに使える状態にあった。

パロ・ペンロップは、渓谷を見おろす大きな出窓のある部屋でわれわれを迎えた。しかし彼は自国の歴史をほとんど知らない様子で、われわれが聞くことのできたわずかの情報も漠然として不正確なものでしかなかったので、この訪問は退屈で面白くないものであった。慣例に従って彼にいくつかの贈り物をした後、私はすぐに暇を請うた。ゾンを調査した後で、谷の対岸の彼の私邸を訪問するという許可を得たのである。

このゾンは、16世紀の終わり頃に建てられたといわれている（訳注3）。1897年の地震の際には、タシチョ・ゾン（Tashi-cho-jong）とプナカ（Poonakha）のゾンは傷んだらしいが、このゾンでは被害はなかったようである。1階は、ゴンパ（gompa）、すなわち一般用の礼拝所たる寺院であった。ここはたいへん立派で均整のとれた大広間で、採光もよく、建物の周囲をなす回廊に囲まれていた。

その部屋は、チベット条約が調印されたラサのポタラ宮にある一室よりもかなり大きく、装飾はどれも立派であった。祭壇の前に吊るされた真鍮の透かし彫りの格子細工は、特に立派で珍しいものであった。西のベランダのもう一方の端には、ダツァン（Ta-tshang）すなわち政府学堂に属するラマ僧たちの私的な礼拝所があり、そこでわれわれは彼らの長である大僧正（the Abbot Lama）のクンヤン・ナムゲル（Kun-yang Namgyel）に迎えられた。彼は、英国のチベット使節団とともにラサに行き、そこの僧侶たちに良い感化を与えた人であったが、われわれの見るべきものを喜んで見せてくれた。

私は、西側の中庭にある2つの城郭のうち、大きい方の建物の北西隅には大きな石を投げ出す古い投石器があることに気付いた。それは、ベランダの垂木の間に注意深く保管されていた。北東隅には特別な賓客のための部屋があり、跳ね橋を越えた向う側の広場には衛兵所があった。城塞と川との間は、いくつもの小さな石造の塔によって防禦されていた。

ペンロップの私邸は川の対岸にあり、婦人たちはそこに居住していた。ペンロップ自身もある程

度の時間はそこで過ごしているようであった。城の中に女が入ることは許されておらず、夜になると門は閉ざされて誰にも開かれない。この家にはゾンペン（jongpen）が2人の妻と穏やかに生活していた。若い方の妻は、年老いた方の妻と前夫との間にできた娘であった。年老いた方の妻は知的でよく喋るが、若い方は恥ずかしがり屋で非常に無口であった。

政府の本拠地

3日間の行進でわれわれはタシチョ・ゾン（Tashi-cho-jong）に到着した。ここはブータン政府の夏の都である。途中、われわれは大きな枝垂れイトスギ（weeping cypress）の下で野営したが、その木は地上から4フィート（120センチメートル）のところで胴周りが51フィート（15.5メートル）もあった。タシチョ・ゾンに到着するまでの後半部分には、過去に氏族同士が領地を争って戦ったことに関係した史跡がたくさんあり、歴史的にたいへん興味深かった。

タシチョ・ゾンは矩形をした堂々たる建物で、川に平行した面は、そうでない面の2倍の長さをもっている。他のゾンとは違う点が一つある。他のゾンには門が一つだけしかないが、タシチョ・ゾンには南側に大きな門が二つあるうえに東側にも川に面して門が一つある。西側と北側は水が湛えられた広い濠で守られている。

パロやプナカとは異なって、ティンプー・チュー（Thimbu Chu）を渡る橋は城とは結ばれていなかった。またその橋の下手には、城に使う材木が流されてきたときに受けとめられるような上手な工夫が施されていた。

城の内部は一つの高い壁によって不均等な2つの部分に分かれていた。南側の大きい方には、一辺約85フィート（26メートル）の長さを持った四角い普通の城郭が建っており、この中には礼拝堂とダルマ・ラジャ（Dharma Raja、当時のブータンの元首、僧界の長）の私的な部屋がある。ダルマ・ラジャというのは精神面におけるこの国の長である。

最初の城郭は1897年の地震のために壊れ、現在の建物は1902年頃に完成したものである。しかしその建て方は粗末で、主な壁には既にひび割れが入っている。また、内部には不均等な沈下の徴候が見られた。装飾はもちろん現代風のものであった。

中庭の南東角はダルマ・ラジャが公務および生活に使う空間となっており、西側正面はティンプー・ゾンペン（Thimbu Jongpen）が同様の目的に使う空間となっていた。われわれは、そこで心のこもった歓迎を受けた。城の北部に位置する比較的小さな部分は、すべて政府学堂（Ta-tshang、ダツァン）のラマ僧たちに占められており、平素は俗人には開かれていない。そこを区切る壁には白色の仏塔（chorten）が列になって載っており、二重の屋根によって風雨から守られていた。

千体の仏

中庭の中央には美しい大広間があり、説教聴取または礼拝用の場所であった。120フィート（36メートル）四方の広さで、少なくとも50フィート（15メートル）の高さがあった。その大広間はよく採光されていて、フレスコ画によって美しく飾られていた。この時、もしここの天井に絹布が張られ、刺繍のついたカーテンと幟が吊られていれば、ここは特別立派な大広間に見えたに違いない。しかし、ラマ僧たちは夏の都であるプナカ（Poonakha）に行って留守であり、すべての装飾物は、注意深く片付けられるかプナカに運ばれたあとであった。

西側にはいくつもの礼拝堂が並んで建てられていた。これらのうちの一つはブータンの建築芸術の素晴らしい標本であった。そのドアの把手は金で象眼を施した透かし彫りの鉄で、非常に美しいものであった。ここには1,000体もの仏像が納められているとのことであったが、私自身が600以上を数えたので、その数字は正しいのであろう。私が訪れたブータンの礼拝堂では、どこでも、祭壇の前に一対の象の牙が置かれ、祭壇には不可欠のものとなっていたが、この礼拝堂のそれは普通のより大きかった。

仏教の儀式

ブータンを含む地域の仏教の問題を研究してみたい読者には、ワデル（Waddell）氏の『ラマ教（Lamaism）』という本を薦めておきたい。私自身は仏教について深く探求するつもりはなく、シッキムとブータンの仏教はチベットから導入された

仏教の分派であり、チベットの様々な僧院のラマ僧がこれらの南方の地域を訪れて人々を改宗させたことによって広まったという理解で満足しておきたい。仏陀自身の教義の大部分はもはや破棄されており、保持されたものも多くの儀礼の中に失われてしまっている。そのため、仏陀本来の宗教は名前を除けば何も残っていない。

礼拝の形式は奇妙にも多くの点でカトリック教会のそれに類似している。彼らがたいへん神聖であると考えている日には、かしらのラマ僧の読経が礼拝を先導する。それに応答して他の僧侶たちが詠唱する。この読経は人の声だけの時もあれば楽器の演奏を伴うときもある。僧侶たちは、なぜかオルガンの響きに似た深い音色を出す大きな笛を吹き、鐘を鳴らし、香を焚く。そして祭壇の前にぬかずき、数珠をつまぐり、ろうそくを燃やす。絢爛たる法衣を着た僧侶たちは列をなして座り、祭壇には金や銀で飾られた容器や仏像が載せられ、さらにその前には明かりが灯されている。灯明は、脇にあるもっと小さな礼拝堂の祭壇にも昼夜を問わず灯されている。これらの光景を見ると、あたかもカトリックの特別な礼拝の場に臨んでいるように感じてしまうのである。

私は、シッキム、ブータン、ラサの寺院で、こうした祝祭日の礼拝を実見したが、フランスやスペイン、特に後者のカトリック大寺院の中に居るかのように想像することはたやすかった。カトリックの牧師とラマ僧は衣服や法衣の点でも似ており、慣習の中にも類似するものがある。彼らの中で完全に隠遁する者は少なくなく、また一定の期間に限って隠遁と同様の生活をして人に会わないで祈祷に専念することもある。

ラマ僧は嫌われ恐れられる

ラマ僧階級は、人々に嫌われているだけでなく恐れられてもいる。その理由は、ラマ僧たちには人に危害を加える力があると見なされているからである。

一般に、ラマ僧たちは無知で怠け者で役立たずである。国の出費で生活しており、その脚を引っ張っていることはたしかである。

ブータンにおいては、ラマ僧たちは国庫の出費で食や衣類・住宅を与えられており、しかも彼らの数は着実に増加してきた。そのためもはや長続きはしようがないほどの大変な重荷になってしまった。私は、ウゲン・ワンチュック卿によって提案された方法によって、この害悪が減少することを祈っている。すなわち、死亡その他の原因で生じた欠員を補充しないでおき、また個々の僧院の収容人員の数を限定することで徐々に数を減らしていくという方法である。

もちろん、すべての法則には例外があって、私は実に有能なラマ僧にも会っている。特にシッキムのポドン・ラマ（Phodong lama）や彼に似た何人かのラマ僧たちは立派な原理原則に基づいて行動しており、私は彼らを尊敬している。しかし、残念ながらそのような人は数少なく、きわめて稀であった。大多数のラマ僧は一般に俗世間にまみれた生活をしており、儲かる職業を得て、かつ自らには災難がふりかからないようにとの目的から聖職に就くだけなのである。

タシチョ・ゾン（Tashi-cho-jong）からシムトカ・ゾン（Simtoka-jong）への行程は素晴らしいものであった。泡立つ流れを何度も渡ったり、ナラ、クリ、シャクナゲの林間の空地を通り抜けた。一方、丘の斜面にはマツ（pinus excelsa）が生い茂っていた。

シムトカ・ゾンは、主尾根から深いガリーで隔てられた支尾根の上に位置している。見かけは古く、あまり良く修繕されてはいなかった。

中央の四角い塔の四方には、これらのものに通常見られる経文入りのマニ車の列ではなく、聖者と高徳の人々の姿を浅い浮き彫りにした四角で黒い石板の列があった。それは素晴らしいもので、様々な異なったタイプのものからなっており、単調な同じ姿の繰り返しなどは全然なかった。実際のところこれがどこに由来するものか私には想像することはできない。しかし、私には中国起源のもののように思われた。マルコ・ポーロの姿さえ同定されている、広東地方の寺にある1,000個の各種の彫像を思いだしたのである。シムトカの彫像の中には、紛れもなくドイツ皇帝にそっくりの顔もある。礼拝堂そのものは壮大な彫刻を施した天蓋の下にあり、私が見たもののなかではもっとも素晴らしい青銅の仏陀像があった。その両脇には人間よりも大きな立像がたくさんあった。

プナカでの絵のような歓迎

ブータンの冬の都であるプナカ（Poonakha）への入り口は、どしゃ降りの雨にも拘らず、絵のように美しく、また興味深い所であった。約4マイル（6.4キロメートル）ほど進んだところでわれわれはトンサ・ペンロップの代理人と出会った。トンサ・ペンロップは、ガサ・ゾンペン（Ghassa Jongpen）をよこして、歓迎のスカーフとオレンジ・バナナ・カキなどの果物かごや、酒を詰めた竹筒を持たせたのである。酒はマルワ（murwa、シコクビエの酒）やチャン（chang、米や大麦からつくる酒）であり、竹筒の容器は編んだヤナギの枝で包まれていた。われわれの元には、トンサ・ペンロップやプナカ・ゾンペン、デプ・ズィンペン（Deb Zimpen、デプ・ラジャの侍従長）などから送られてきた、華やかな飾りを付けたラバが多くあり、われわれ一人に対して少なくとも5～6頭ずつもいた。そのためわれわれは乗りたいラバを自由に選ぶことができた。このほか、トンサ・ペンロップは6人からなる音楽隊もよこしていた。2人はトランペット吹きで赤い服を着ており、残りの4人は緑の衣装を着てドラムと鐘を担いでいた。この様々な色合いの集団は絵のようで本当に美しく、プナカに向けてわれわれはうきうきとした気分で再出発した。

ゾンが最初に目に入ってきたところまで来ると礼砲が放たれ、さらに多くの家臣たちに出会った。続いて行列は踊り手たちと合流した。音楽隊と踊り手たちは私を先導して丘を下っていったが、道を降りながら一種のダブル・タンバリンをねじったりくるくる回転させながら打ち鳴らした。行列は、丘に沿って半マイル（0.8キロメートル）ほどにも伸びていたに違いない。

まず最初に笛と太鼓、第62dパンジャブ連隊（the 62d Punjabis）が出て、続いて馬丁たちが約20頭のラバを引いた。ラバの多くは美しい鞍敷きの布をつけており、他の家来たちを乗せていた。ラバの次には黄色いスカーフを付けて美しい絹やブロケードの服を着たトンサ・ペンロップの護衛兵約20人が続いた。音楽隊と踊り手たちは私と私の一行の前を進み、われわれの後ろには、緋色の制服を着て騎乗した私の部下の当番兵と召使いたちが続いた。道が狭いところでは行列は一列縦隊で進まねばならなかった。そして徐々に橋を渡りかける頃には、到着を見ようとやってきていた何千人もの地元民たちに勇ましい姿を見せねばならなかった。

われわれを待っていた野営地には、おもだったブータンの役人たちが揃っていた。すなわちトンサ・ペンロップ本人（現国王）、ティンプー・ゾンペン、プナカ・ゾンペン、シュン・ドニェル（Zung Donyer、中央政府の儀典長）、デプ・ズィンペン（Deb Zimpon、デプ・ラジャの侍従長）である。前の3人にはすでに私はチベットで会っており、後の2人にはバクサ（Buxar）で会っていた。

彼らは私に対して実に真心を込めた挨拶をして天候が悪かったことに同情した。そして、われわれの旅行について尋ね、それが大過のないものであったことを望んだ。しばらくして雨が止むと、われわれがくつろげるように彼らは別れを告げて去った。私のためにと大きくて快適なスイス風のコテージ・テントが張られており、それ以外にも頂点に刺繍をつけた炊事用テントと家来のためのテントの二つがあった。これらのテントと私自身の馬車によって、非常に贅沢な野営地ができあがった。

難攻不落の城塞

私に対して非常な敬意を表してくれたことがほかにもあった。デプ・ラジャ（訳注4）の音楽隊が川向こうのゾンの外庭からわれわれの野営地に向かって演奏したのである。これは、橋の対岸からトンサ・ペンロップ自身に対しても送られた敬意であった。

プナカ・ゾンは川の中州にあるため水を得るのはたやすい。しかし一般に尾根の上に建てられていることの多い他のゾンでは、それがいくらか困難である。多くの場合は、ドゥゲ・ゾンのように谷底まで下るジグザグのくぼんだ道を作らなければ水の補給が確保できない。そして、籠城戦の際にはその道の曲がり角すべてに設けた見張りの塔からこの道を防御したのである。

ほとんどのゾンで適用されている建築様式（plan）は、全体をおおよそ平行四辺形の形に作っておいて、その内部をいくつかの中庭に分けるというものである。プナカ・ゾンの入り口に達するには、約20フィート（6メートル）の高さを

もつ急な木製の踏段を登らなければならない。この階段は緊急時にはたやすく取り外すことができる。入り口の戸は大きくて重い木戸であったが容易に閉じることができ、夜には必ず閉ざされている。

入り口を通ると最初の中庭に出る。主たる城郭はこの中庭の南端に位置する四角い建物となっており、基礎の部分で一辺約40フィート（12メートル）、高さは80フィート（24メートル）ある。そして、この中庭に面して四方には二階建ての建物が連なって建っており、俗人の官吏の住居として使われている。城郭を越えると別の中庭がある。ここもやはり二階建ての住居で囲まれている。さらに奥にあるもう一つの中庭とここを分かつ建物の中に公式謁見の大広間（Durbar Hall）があって、それはゾン全体に相当する幅をもっている。奥にある中庭は小さめで、それの南の方には最初のよりは小さな第二の城郭があり、その周囲にはそれより大きな建物が建っている。

それを越えるとさらにもう一つの中庭があり、そこは約3,000人にも及ぶダツァン（Ta-tshang、政府学堂）のラマ僧に完全に任されている。この中庭の中央には大きな寺院が建っている。ラマ僧たちの住居は中庭の両側を占めており、突き当たりの面からは川の合流点を見下ろすことができる。

これらの中庭の下には穀物を貯蔵するための倉庫がいくつかあるが、その面積の大部分は土と岩で満たされていた。

すべての建物の屋根は割板で葺かれており、従って火事の際には簡単に火が点くのでたいへん危険である。しかし、弓矢を使っていた頃にはこのような城塞は事実上難攻不落であった。必要とあらば6,000人あるいはそれ以上もの人をこのゾンには収容することができたのである。

風変わりな儀式

プナカでは公式謁見の準備に多くの日々を費やした。公式謁見はたいへん興味深いものだったので、ここにすべてを記しておくことにしよう。不幸にして公式謁見の朝は大雨であったが、儀式が始まる前には晴れ上がった。儀式はプナカ・ゾンの大広間で行われた。

すべての準備がゾンの中で整うと、われわれは小さな行列をつくって野営地を出発した。きちんと正装したレンニク少佐（Major Rennick）と私は、第40パターン連隊（the 40th Pathans）の中隊長（Subadar）であるジェハンドゥード・カーン（Jehandud Khan）の率いる護衛たちに先導されてゾンに向かった。ゾンに着くとわれわれは公式謁見の大広間へとうやうやしく案内された。この大広間は立派で美しく、ポ・チュー川（Po-chu）を見おろすことができる広いバルコニーがついていた。そして2列の柱が2つの通路を形づくっていた。中心部すなわち身廊（nave）の部分には、高い屋根に向けて幅の広い梁間が開いており、美しく刺繍された中国製の絹の天蓋が吊るされていた。

柱の間にはチェンズィ（chenzi）とギャンツェン（gyantsen）という美しく彩られた絹が吊るされていた。トンサ・ペンロップの座る席の背後には針で刺繍した素晴らしい絵が吊るされていた。これは一種の刺繍であったが、ブータン人はこの技術に秀でており、日本や中国など、世界中で私が見てきたものに十分に比肩しうる素晴らしいものであった。大広間の上座、つまり北の端には、ブータンの礼拝所ではいつも見かける高い祭壇と仏像があった。この祭壇の手前に一段高くなった台座があり、そこにデプ・ラジャとプナカの政府学堂の大僧正（Abbot）が並んで座っていた。デプ・ラジャは赤い僧衣の上に濃い黄色の肩掛けを掛けており、その左側に座っている大僧正は通常の法衣を着ていた。

台座の右側には、私、レンニク少佐（Major Rennick）、ポール氏（Mr. Paul）、中隊長のために真紅のカバーを掛けた椅子が4つ並べてあり、それぞれの椅子の前には果物や茶菓が置かれている小さなテーブルがあった。贈り物を持った私の使用人たちは私のすぐ後ろに立っていた。

身廊の反対側には濃い鮭肉色のブロケードでできた大きなクッションが掛かった台座があり、そこにウゲン・ワンチュック卿（Sir Ugyen Wangchuk）が座っていた。彼は中国製の濃紺の絹でできた立派な礼服を着ていたが、それには好運・金運を象徴する富（Fu）という漢字が金糸で刺繍されていた。ウゲン卿の下手には臨席する官吏たちの椅子が官位に従って並べられていた。

側廊には白い絨毯のうえに主要な政府学堂のラ

マ僧たちが2、3列になって座っていた。鞭を持った僧侶が4人おり、真鍮で縁を飾った警棒とサイ（犀）の革紐を2重に取り付けた鞭を持って列を行ったり来たりして座る順番を守らせていた。われわれはいちばん下手のところからこの大広間に入って来たが、そこには下級官吏たちと私の護衛たちが集められ、テプ・ラジャに向かうように立っていた。これらすべてが華々しく印象的な光景であった。

現国王に爵位を与える

この国の上級官吏たちは、私が入って行くときには立ち上がって出迎えた。彼らとわれわれの一行が席に着いたあと、秩序と沈黙が戻るまでには少しの間があった。それから私は立ち上がって、通訳であるライ・ロブサン・チェデン（Rai Lobzang Choeden）に対して、チベット語で短い声名を読むように指示した。そして、この声名が終わると、レンニク少佐とともにデプ・ラジャの前に進んだ。勲章と授与状は、銀の房付きの濃紺のクッションの上に載せて、レンニク少佐が持っていた。われわれの動きにあわせ、トンサ・ペンロップ（ウゲン卿）も反対側から前に歩を進めた。

私は勲章のリボンをウゲン卿の首のまわりに掛けて星章をピンで留め、授与状を手渡した。ウゲン卿は、英国王兼インド皇帝（King-Emperor）が彼に与えた栄誉に対して、最大の感謝の意を表明した。続いて私は贈り物を手渡し、彼の手に白い絹のスカーフを置いて、私の心からなるお祝いと彼の幸福を祈る気持ちを申し述べた。

その後、私の一行の他の人々が贈り物を渡すことで、われわれが関係する部分の儀式は終了した。すると、ウゲン・ワンチュック卿は向きを変えて、デプ・ラジャ（Deb Raja）に対して敬意を表し、デプ・ラジャから祝福を受けた。デプ・ラジャはチョーレ・トゥルク（Chole Tulku）としてブータンの僧界の長でもあったが、ダルマ・ラジャ（Dharma Raja）の転生を待ちのぞんでいた（訳注5）。ウゲン卿は、同様の作法で大僧正からも祝福を受けた。

すると、ラマ僧たち、役人たち、家来たちの何時終わるともわからない行列が始まった。各人はスカーフと贈り物を持って来て、ついにウゲン卿はほとんどスカーフに埋まってしまう程であった。そうこうするうちに、身廊にはたくさんのお茶や米の袋、インド・コーン、様々な色の付いた絹・ウール・綿などの反物、小さな砂金の袋、インド・ルピーの現金などが運びこまれ、身廊は隅から隅までこれらの贈り物の山で一杯になった。

それぞれの贈り物が床の上に置かれる度に、その贈り主の名前が公表された。確かめたわけではないが、贈呈者は少なくとも200人はあったと思われる。これが行われる間、彼らが派手なふるまいをしたり互いに見栄を張り合う様を見ているのは面白かった。何人かは贈り物を床の上にドサッと投げ下ろし、腕を一杯に伸ばしてスカーフをサッとかっこよく突き出していた。役人に会うときに白い絹のスカーフを使うことは、相手の地位の上下を問わず、ブータンでは一般的な慣習であった。

これらの祝賀が終わると、側廊にいるラマ僧たちを含め、全員に対してお茶とお菓子がふるまわれた。ラマ僧たちは各段階である種の感謝の祈りを詠唱した。最後にビンロウジ（Beetel、ビンロウの種子）とキンマの葉（pan、パン）が配られた。ビーテル・ナッツ（ビンロウジ）はヤシ科の植物の実であり、パンは渋味のある木の葉である。ブータン人は、これに少量の石灰を混ぜて食べる事を好むのである。

興味深いビールの儀式

祝宴の開始に当たって、この国のビールであるマルワ（marwa、シコクビエの酒）の大鍋が身廊の下手に据えられ、奇妙な儀式が行われた。シュン・ドニェル（Zung Donyer、中央政府の儀典長）がお椀の形をした長い柄杓でその液体を3回混ぜ合わせてから、それに酒を酌んで片手で高く持ち上げ、もう一方の手をあげて祈った。

彼はこの儀式を3回繰り返したあと、柄杓に一杯を酌んでデプ・ラジャの方に進んだ。それをデプ・ラジャが祝福すると、シュン・ドニェルはトンサ・ペンロップの方に向かい、彼の手にいくらか酒を注ぎこんだ。それが終わると、シュン・ドニェルは引き返して残った分を大鍋に戻した。公式謁見の大広間でお茶やお菓子の分配に預かれない見物人は数多くいたが、すでに大鍋は彼らの方に移動されていた。この酒はあきらかに見物人たちへのふるまいのためのものだったのである。

続く儀式は壮大であった。一辺の赤い布と白い絹のスカーフを先に結び付けた木の槍がデプ・ラジャのところへ運ばれた。槍はデプ・ラジャの祝福を受けたのち、トンサ・ペンロップの上に波打つようにかざされ、トンサ・ペンロップは槍の柄の端に恭しく触れた。この後その槍はトンサ・ペンロップの部屋へと運ばれた。

一連の儀式のしめくくりとして、デプ・ラジャの先導によりラマ僧たちが短い祈祷をおこなった。これをもってすべては終わり、われわれは野営地へ帰った。

この日の儀式はもっとも興味深いものであった。壮大でありながら秩序や威厳があり、進行には何の滞りもなかった。現地人によると、ブータンでは様々な行事において変化が生じているとのことであった。従来は、叙勲を受ける者は単にデプ・ラジャと大僧正の所へ伺って祝福を受けるのみで、祝宴を開いたり贈り物を受けることは私邸において行う習わしであった。しかし、今回初めて、トンサ・ペンロップのためにかくも公的かつ念入りな勲章授与の儀式を行ったのである。それは、英国政府に敬意を表したいという彼らの気遣いでもあった。

国民の精神上の首都

私は、プナカでの滞在中にタロ僧院（Ta-lo Monastery）を訪問した。3時間のつらい山登りの末にようやく到達することができる僧院である。この僧院は、小さいが立派な2階建て建築物の集合となっており、彫刻を施されて色が塗られたベランダのある建物が山腹に散らばっていた。建物はどれも花や木の生えた小さな庭に囲まれており、あちらこちらに礼拝所や飾りのついたチョルテン、廟があって、単調さを破っていた。

この大きな僧院は、背景をなす薄暗いイトスギやマツの木立ちの前にそびえていたが、さらに登って行くと美しく飾られた最近亡くなった先代ダルマ・ラジャ（Dharma Raja）の隠遁所があり、あたかもすべての建物群のうえに被せられた王冠のようにぴったりと調和していた。この偉大な僧院には多くの礼拝所があったが、きちんと清潔にしており風通しが良く、窓ガラスはたいへん目立っていた。

興味深い物は、大きな銀の仏塔2つであった。それには2人のシャブドゥン・リンポチェ（Shabdung Rimpoche）の灰が納められていた。多くの宝石がはめ込まれて装飾されており、その宝石の大部分はトルコ石であった。先代ダルマ・ラジャが使っていた仏具はここに保管されていたが、それはブータンでもっとも素晴らしい金属加工の標本であった。

柱や天蓋に施された彫刻は素晴らしいものであったが、金属を透かし彫りにしたあまりにも多くの渦巻模様で何重にも飾られていたために、それを詳細にたどることは困難であった。ある祭壇の前には、8.5フィート（2.6メートル）もの長さの象牙があり、刺繍とアップリケで飾られた壮大な幟がたくさんあった。実際、この建物全体が宝物で満たされていた。

私は、先代シャブドゥン・リンポチェの兄弟だというラマ僧に迎えられた。彼こそが私を招待してくれた人物であった。彼は腕を広げ、最大限の親しみを表現したのだったが、私が望む物をすべて見せるために箱や扉の封印を解いて、私が宝物を調べることを許してくれたのだった。このようなことが許されたヨーロッパ人は、私が初めてではなかろうかと思う。見ることのできた宝物、特に刺繍が施された古い幟は一見の価値があるものであった。先代シャブドゥンの住居さえも私に開放されて、私はその個室に入ることをも許された。これは、彼が私に与えることのできた最高の栄誉であった。

われわれは、求めたことすべてに応じてもらうことができた。また、すべてのことがわれわれに好都合なように配慮されていた。そして、ラマ僧は、われわれが長くは留まれないがためにこれ以上もてなすことができないのをたいへん残念がったのである。

タロ僧院で私をもてなしてくれた婦人たちは、後にプナカへやって来て、私を訪問してくれた。蓄音機を聞いてたいへん喜んだ後、彼女たちは、各々がいくらかの絹と子供用のおもちゃを持ち帰った。彼女たちと一緒にタロ僧院の大僧正であるタンゴ・ラマ（Tango Lama）もやって来た。彼は40才ぐらいの男で、弟のニンセル・トゥルク（Ninser Talku）は11才くらいであった。夕刻になると、そのラマ僧はわれわれと食事を共にするためにティンプー・ゾンペン（Thimbu Jongpen）

に伴われて戻って来た。しかしこのときの晩餐が実際うまくいったものかどうだったかはわからない。というのも、ラマ僧はわれわれがよく食べているニワトリやマトンを食べることは許されてなかったからである。ティンプー・ゾンペンは、すでに彼は食事を済ませており、食欲がないのだと詫びたのであった。

純真で親切な国民

私が出会ったブータン人たちはみな、シッキム人と同様にヨーロッパの食物を非常にありがたがった。彼らは仏教徒であってカーストの禁忌はない。食事に呼ばれることは名誉であると考えており、自分が受けた好意に対していかにしてお返しをするかということに気をつかう人々なのである。この点はインドの原住民とは著しい対照をなす。インドの原住民の場合は外国人とそのような交際をすれば汚れると考え、アウトカーストとして社会から追放されてしまうのである。ブータン人は、親しい関係を築くためには素晴らしい性格をもっているといえる。役人たちはほとんどみな非常に禁欲的であるが、礼儀正しく上品に振る舞おうとし、ワインを飲むことを断わるようなことは決してない。

プナカでのブータン人たちのふるまいは興味深かった。シュン・ドニェル（中央政府の儀典長）は非常に年老いていて経験豊かな酒飲みなのだから、他の者のためにも酒を飲んでもらわなければとまわりの人々は彼をはやし立てた。そして、半分空になったグラスを何杯も彼に渡して飲み干させたのである。しかし、そんなことをしながらも、その強さを知らない異国の酒に彼が酔っ払ってしまうことがないように、人々はしっかりと見張っていたのであった。

晩餐の後で、私はタンゴ・ラマ（Tango Lama）にヨーロッパの景色が見える立体鏡を見せた。彼はたいへんこれを楽しんだので、彼が暇を請うたときにそれを贈った。さらに彼は何か動物のおもちゃ、とくにゾウのおもちゃは持ってきていないかと尋ねた。タンゴ僧院で建設中の新しい廟の前に置きたいとのことであった。たいへん幸運なことに、私は鼻を伸ばして音を出すゾウのおもちゃを一つ持っていた。ほかに、ガラガラと頭を振るロバや、押すと妙な音を出すヤギなどもあった。彼はこれらの贈り物をたいへん喜び、意気揚々と引き上げていった。とはいえ、そうしたおもちゃがいったい彼の礼拝を助けることになるのか、それとも彼の子供たちを楽しませることになるのか、私にはわからなかった。

翌日、別れに際して、今度はウシの模型を持っていないかどうかと彼はきいてきた。しかし、残念ながらそれは見当たらなかった。動物の模型や簡単な仕掛けのおもちゃを贈り物の間に入れておくというのは非常にいい考えであった。これらは贈り物としてたいそう人気があり、跳び上がるウサギにはとりわけ人気があって何度も要求された。こんなものでいとも簡単に興味を引き出すことのできる人たちであるから、ブータン人はたいへん純真な人々なのである。

プナカにいた間に、私はターキン（Takin, Budorcas Taxicolor Whitei）の標本を手に入れた。これは非常に珍しい動物で、私は生きた標本を英国に持ち帰ることに成功した。それは現在ロンドンの動物園にいるものである。

ある家庭の訪問

公式謁見場での儀式をもって私の公務は終了した。しかし、トンサ・ペンロップ（現ウゲン・ワンチュック卿）は、私が彼とともにさらに旅行することを望んだ。彼の公邸であるトンサ・ゾンを訪れ、さらに彼の私邸と城のあるジャカ（Byagha）へ行こうというのである。そこで私の一行はウゲン卿の私的な賓客となって、もっとも魅力的で思いやりに満ちた招待主の接待を受けることになった。彼は、野営地の準備、道路の補修、ひいては宿泊施設の建設さえも行ない、われわれを楽しませるためのすべての手配をしてくれた。実際のところ彼以上のことができるような招待主はいなかったに違いないし、彼ほどのことができる人があったとしても、それは彼を除けばほとんどいなかったに違いない。

ウォンディ・ポダン・ゾン（Angduphodong Jong）を通過する道筋を辿って、われわれは4日間の行進の末にトンサに到着した。トンサ・ゾンに近づいた所では歌を歌う少女の一群がわれわれを出迎えた。そこは城の入り口の直下であった。そこから、ほとんど垂直に近いような道をたどって、彼女たちは歌を歌いながらわれわれを城の中

に招き入れた。私は、むしろ歩いて登りたかったのだが、馬に乗ったまま急勾配でジグザグになった踏段を上がらねばならなかった。私に対する礼儀として、歩いて到着することなどは期待されていなかったのである。

ウゲン卿が野営地に現れ、次の情報を伝えてきた。城のラマ僧たちの準備が整ったので、さきほどは雨のために中止となってしまった踊りを行いたいというのである。そこで私は急いで昼食をとり、城に赴いた。踊りは上手に進行した。踊り手たちは、想像しうる限りのあらゆる色の豪華な衣装を身につけていた。踊りは、トントンと妙な音を出す太鼓や大きなラッパ、笛、シンバルの伴奏を伴い、奇妙で珍しいものながら魅力的な彼らの音楽を生み出していた。しかし、私にとってもっとも興味深いのは踊り手のつけた仮面であった。それは、シッキムで見たような木を削ったものではなく、布と粘土でできた混凝紙（パピエ・マーシェ）から型取られたものであった。それらは巧妙なもので、様々な動物の頭を模したものであった。その動物の特徴をよく表現しており、一見すればその違いにすぐ気づくような出来であった。

城塞は素晴らしい建物群で構成されていた。数多くの中庭、寺院、住居があり、全体でおよそ3,000人のラマ僧と俗人を収容しているが、最大では6,000人は収容できるだろう。

ブータン建築のもっとも際立った特徴は、すべての壁面には独立した部屋があり、その窓は内側に傾斜した奇妙な形をしていることであった。この建築様式はどこから来たものであろうか？　この僻遠で接近しがたいヒマラヤの地に、アッカド、バビロニア、アッシリア、ペルシアなどを通ってエジプトからもたらされたのだろうか？　それとも、アジアのどこかでこのまれな形式が育まれ、ここがその伝播の中心となっていたのであろうか？　これはブータンにおいて出くわすことのできる面白い問題の一つであるが、何らかの体系的な研究をする値打ちのあるテーマであろう。

水田で繁栄を祈る

ある朝早く、耳ざわりの良い鐘の音が聞こえ、稲を作る水田で繁栄を祈る春の祭りが始まることを告げた。

絵の様な長い男女の行列が、ドニェル（Donyer、儀典長）に先導されて山腹をうねうねと廻りながら下りてきて、最初の田んぼのところで止まった。この田んぼには前の日から水が張られていたが、それより下の田んぼにはまだ水は引かれておらず、乾いたままであった。一団はみなそこへ座り込んで茶菓子を少し食べた。突然、男たちが立ち上がると上着を脱ぎ捨てた。この合図とともに女たちは水が張られた田んぼに入った。そして、下の段の乾いた畑にいる男たちに向かって、土くれを投げたり泥水をかけ始めたのである。男たちは、なんとかして上の田んぼへとよじ登ろうとし、女たちはそれを阻止するような具合いである。

これに続いて、水浸しの田んぼの中で男たちと女たちの戦いが始まった。陽気なものながら、野性的で気違いじみた戦いである。男たちは田んぼの一角を占拠しようと全力を尽くし、女たちもやはり全力で男たちを外に追いやろうとするのである。

戦いのルールはしっかりと守られていたものの、男たちのリーダーであったドニェルは惨澹たる攻撃を受けていた。攻撃しようとする男が一人つき落とされると、対抗する女たちはドニェルを引き上げて一息つけるところにいったん休ませておいたうえで、次なる猛攻を加えるのであった。しかし、徐々に女たちが男たちをつき落としてしまい、田んぼの中に残る男は最後の一人になってしまった。この男は非常に手強く力も強い役人で、オーバーハングした岩にしがみついて、敵に背を見せながらも足を使って強烈に泥水を撥ねあげていた。彼が撥ねあげる泥と水の量はたいへんなもので、女たちは誰もその男に近づくことができなかった。

しかし、他の男たちはみな追い払われ、最後まで残った男とドニェルはとうとう道に這い上がることを許されて、その年の戦いは終わったのであった。この儀礼の終わり方は、たいへんよい吉兆を示すものとみなされていた。なぜなら、女たちの勝利は来るべきシーズンの土の肥沃さと、羊や牛の群の多産を予兆するからである。参加した人々はこのことに喜びながら、各々の家路へと帰っていった。

流水で回るマニ車

トンサ・ゾン東面の城壁の下、渓谷の中には流

水で動くマニ車（prayer-wheel）の入った建物がある。宮殿のもともとの名前であるチュコルラプチ（Chu-knor-rab-tsi）はこれから取られている。その中には2組のマニ車があったが、それぞれ、車軸には3つのマニ（mani）すなわち経文の入った円筒が取り付けられており、一番小さい筒が上になるように重ねられていた。これらは長らく動いてないことが明らかであった。翌日、われわれはとくにすることがなかったので、石やごみでふさがれていた水路を掃除してこれを動かすようにする作業を手伝った。これがわれわれの功徳を積む行いとなれば幸いである。

ブータンにいる間、このような流水で動く仕掛けのマニ車はしばしば見かけたが、そのほとんどは絵に描いたように朽ち果てていて、まだちゃんと動いているものはごく僅かであった。よく知らない読者のために、これについて簡単に説明しておこう。このマニ車というのは祈祷のための車で、中空の円筒で作られている。筒の中には印刷または手書きの経文が詰められており、筒は木でできた垂直の回転軸に固定されている。その軸の下方には水平のひれ板が取付けられており、それに向かって射水路（シュート）から水が当たるようになっている。軸の下端は鉄の石突きとなっており、それが鉄の受け口で支えられて、水流の力がかかると回転するようになっている。この筒が1回転すると経文が1回読まれるのと同じ効果があり、そのマニ車を作った施主の御利益と名誉を祈念することになるのだと信じられている。

このマニ車をちゃんと動くようにすること自体は実にたやすい。しかし、おそらく彼らの仏教の考えかたではこれを維持・修理するのではなく作るのでなければ功徳を積む行いにはならないのではないだろうか。そのために誰も世話をする人がいなくなり、水路は詰まったまま、はね板も壊れたままになって、結果として大部分のマニ車が停止状態になってしまっているのだと思われる。

これは微笑ましい程に容易な祈祷の方法であり、巨大なマニ車も幾つか建てられていた。シッキム、ラチェン渓谷（Lachen）のラムテン（Lamteng）にあったものは、4トン以上もの経文紙が入っており、高さ9フィート（2.7メートル）、直径4.5フィート（1.37メートル）にも及ぶものであった。しかし、こうした巨大なマニ車には水力で動くものはほとんどなく、人がまわすようになっているのが普通であった。軸の梃子の端にはクランクがついており、祈祷する人はそれを廻せばよいのである。すると1回まわるごとに自動的に鐘が鳴って、お経を唱えた回数がわかるのである。

王の私邸

トンサで数日を過ごした後、われわれはジャカ（Byagha、ブムタン）へと進んだ。ウゲン卿の私的な賓客として受け入れられたため、12日間に及ぶジャカ訪問は今回の探検旅行の中でももっとも楽しい部分であるとともに、プナカでの儀式のように興味深く印象的な訪問であった。招待主とわれわれの交際はまったく自由で屈託のないものだったから、数日の間ジャカに滞在したことで、ブータン人の生活や習慣について深く知ることができた。

緩やかな坂を下るとマツ林の中の空き地に出た。そこからは川がゆったりと流れているジャカの広々とした谷あいを見おろすことができた。右の岸には緑葉が出かけた木立に囲まれた大きな家と礼拝堂があった。ウゲン卿の姉妹の家であり、その隣には彼が生まれた古い家があった。500フィート（152メートル）ほど上方の中央の尾根の断崖のうえには城があった。この城は新しく再建されたもので、1897年に古い城が完全に壊されたあと、もとのよりはいくらか小さいものながら全部建て直されたものだった。城よりもさらに上方には、尾根が広くなってマツの森に囲まれた林間の空き地があり、そこにわれわれの招待主の夏の家があった。城と同じように新築であった。ウゲン卿は、城の上方の斜面に芝を植え、テラスを作っていた。

われわれが滞在したジャカの野営地ほどに、絵のような美しさをもつところはなかった。谷の上方を見ても下方を見ても、いたるところ眺めが美しかった。グリフィス博士（Dr. Griffith）は、70年前に次のように記している。「この地方は非常に美しかった。特に少し小高いところはそうである。しかもこの季節には花々がさらに美しさを加えていた。サクラソウは無数に咲き乱れ、あらゆる林間の空き地を優美なスミレ色の衣で覆っていたし、上方にはシャクナゲが目のさめるような深

紅色に燃え上がっていた。」 彼はさらに書き加えている。「村はほとんど見えず、耕作された土地も非常に僅かであった。」

この最後の記述とはまったく正反対に、私の目前ではすべての丘が少なくとも11,000フィート(3,350メートル)あたりのところまで耕されていた。この違いについて私はウゲン卿に質問したが、その返事にはたいへん驚かされた。つまり、12才の少年であったウゲン卿がこの谷を離れた30年前にはジャングルばかりであり、いま居るところも対岸の斜面もそうであったという。約18年前に殺し合いの戦争が終わってから、ここはようやく耕地として開かれたという。政権の安定というのものはそんなものであろう。しかし現在でもこの谷はまだまだ貧困であり、少しばかり裕福になったといっても、それはもっと不運な谷と比べてみればというだけのことである。

われわれが野営地に落ち着くとすぐに、ウゲン卿の姉妹と彼の2人の娘、ティンプー・ゾンペンの娘がやってきて歓迎の意を表した。若い娘たちはかわいらしく、気取らない陽気な少女たちであった。ウゲン卿の姉妹はといえばすでにおばあさんになっていたが、人が良く、かつては美人であったに違いない面影を残していた。彼女たちはみな風変わりで独特の着物を着ていた。この着物は、色付きの縞模様に織られたブータン製の長い布でできていた。これを身体に巻いて肩のところで結び、腰のところを明るい色のブータンの帯紐で締めていた。彼女たちは、大きくて粗いサンゴやトルコ石、コハクのネックレスをつけており、ときには金線加工のネックレスや金銀の腕輪をつけていることもあった。髪は飾らないままで短く刈るか、2つに長く編んでいた。娘のうち年長の方は幼い息子を連れてきていた。私はその子にお菓子の入った瓶を一つ与えたが、その子が喜んだ様子はヨーロッパ人の子供とちょうど同じであった。母親の方がのちに私に語ったところでは、この贈り物のせいでこの子はずっと私のことが好きであったらしい。

到着してすぐに、ウゲン卿は私を彼の家に案内し、その隅々まで見せてまわった。建物の東端部は、建物の全幅にわたる長さの全部が風通しの良い製造工場となっていた。そこでは、多くの少女たちが忙しく絹や木綿の布を織っていたが、量のうえでは絹の方が多かった。この絹は主にアッサムや北部丘陵地帯で得られるタッサー・シルク(tussar)であった。すべてがたいへん魅力的で、家のような生活空間を作り上げていた。ここは、明らかに優秀かつ有能な女主人によって管理されていた。その女主人はウゲン卿の長女であったが、ウゲン卿と住むとともに彼の家族を監督していた。

ある朝、われわれは彼と一緒に朝食を食べたが、ご飯のほかに小さな皿に盛られたたくさんの中華風の料理が出てきた。テーブルの中央には色々な種類の肉が盛られた大皿があった。朝食後、私は弓の競技会に行ってそれを見なければならなかった。標的までの距離は少なくとも150ヤード(137メートル)はあった。弓の腕前の方は、われわれがプナカで見たものやグリフィス博士の記述よりも一段と優れていた。2つのチームがあり、それぞれのキャプテンはウゲン・カジ(Ugyen Kazi)とトンサ・ドニェル(Tongsa Donyer、トンサ・ゾンの儀典長)であったが、前者のチームが勝った。

ウゲン卿の人格

ウゲン卿は、たいへんな苦労をして私のために何冊かの本を探し出してくれた。これらの本の中の記述から、私は、従来われわれがよく知らなかった古い時代のブータンの歴史について知ることができた。

彼自身の人生は、少々痛ましいものであった。青年時代には非常に可愛らしい娘と結婚し、彼女にはたいそう惚れ込んだ。しかし、2番目の娘を産んだあと、彼女は原因不明で突然死んでしまった。そのショックはウゲン卿にとってたいへん大きかった。彼はひどい病気になり、回復後も快活さはまったくなかった。そして彼の国の歴史と伝説を読んで研究することに慰めを見いだしたのであった。彼の何人かの家来が評しているように、彼はラマ僧以上によく本を読んでいた。私が出会ったブータン人の中では、ウゲン卿は、国の内外の雑多なことに真の知的な興味を持つ唯一の人であった。彼は決して酒を飲まず、その他の悪徳にふけることもない。彼は膨大な数の書物を収集したが、不幸にもそれらの大部分はタシチョ・ゾン近くのデチェン・ポダン(Dechen-phodang)が

焼け落ちたときに失ってしまった。また、ブータンの主要な建物すべてを破壊した1897年の地震のときに、そのほかの古文書も失った。

女たちの生活

われわれは、トンサ・ペンロップの姉妹にも歓待を受け、彼女の家の近くの野営地で何日もの間滞在した。ここで、われわれはブータンの婦人たちがいかに主婦として有能であるかを見ることになった。彼女たちは、すべてのことを非常に計画的にこなしていた。朝には家来たちにその日の食糧を与えていたが、食べさせなければならない家来の数は数百人にものぼるので大変な仕事であった。それが終わると再び蔵を閉め、大きな家の主婦がこなさなければならない糸つむぎや機織りなどの仕事について、様々な指示を出して人を割り当てていた。そして、これらの女主人たちがうけもつ多くの仕事を見るのは興味深いことであった。

われわれは、グル・ラカン僧院（Guru Lhakung Monastery）の見物に案内され、一軒の民家で昼食を食べた。この民家では、木綿・羊毛・絹を織ったり、鐘や仏像などの金属の鋳物をつくったり、刀を作ったり、金銀細工を加工したりという、あらゆる製造現場を見学することができた。とくに刀や金銀細工は絶妙のデザインで仕上がりもよかった。これらの製造現場は、すべてが非常に興味深くまた有益なものであった。

男たちは優れた職人である

ブータン人たちは優れた鐘の鋳造技術をもっている。私は、非常に澄んだ音を出す優れた標本をいくつか見ることができた。最上級の鐘には多量の銀が含まれているが、彼らは決して大きな寸法のものは作らない。私が見たもののうちもっとも大きかった鐘は、直径がおおよそ24インチ（61センチ）ほどあり、高さもそれと同じくらいのものであった。

鉄の加工においても彼らは立派な職人であった。彼らのもつ刀剣は、いまだに炭鉄（charcoal iron）で作られたものながら、その多くは優れた製品で仕上げも立派であった。刀剣を研磨する技術も素晴らしく、あたかも刃が銀で出来ているかと思われるほどに美しく磨かれていた。

これらの刀剣は非常に美しい武器である。刃はよく鍛え上げられており、銀の柄にはトルコ石やサンゴで象眼が施されていた。銀製の鞘には金箔の模様があり、明るい色の絹紐と飾り房が付いた革のベルトが取り付けられていた。彼らのもつ短剣もまたたいへん立派であった。その多くは尖った3角形状の刃先をもち、側面には縦溝が彫りつけられていた。鞘は精巧な金銀の透かし彫りで、トルコ石がはめ込まれていた。

要職に就いている人の家には、どれも大きな作業部屋が付随していた。そこでは機織りが行われ、様々なものが作られていた。主人のために絹の着物を作ったり、すぐれた羊毛や木綿の織物を織ったりしていた。刺繍をする作業もかなり見られた。

私の知る限りでは、僧院にはブータン特有の技術が保存されている。その一つは針で刺繍を施すことによって聖者の絵を作り上げることである。それは僧院内部に吊り下げる幟に見ることが出来た。色のついた絹やブロケードの無数の布切れを用いて、あらゆる種類の精巧で芸術的な刺繍装飾が施されており、これらの多くは文字どおりの芸術品であった。

ブータン人が優れているそのほかの工芸は、割竹から精巧なマットレスやバスケットを作ることである。（ポンチューと呼ばれる）バスケットは、非常に細かく裂かれた籐を美しく編んで作られており、着色された籐が部分的に混じることによって模様が浮き出るようになっている。円形をした上下2つの部分に分けられるようになっており、この2つは、水を運ぶのに使うことさえできるほどにぴったりとくっつけられるようになっている。このバスケットは直径が6～15インチ（15～38センチメートル）ほどあって、ブータン人たちは、主にご飯やおかずを運ぶ弁当箱として使っている。また、彼らはもっと大きくて強いかごも作っている。これは、われわれの使っているラバの荷かご（mule-pannier）にたいへんよく似た形をしたもので、やはり駄獣を使って荷物を運搬するのに使われている。

マットレスもまた同じ材料から非常に細かく織られたものであった。割竹のうちかなりの部分は模様を作るために染められている。このマットレスは心地好いほどに細かくかつ柔らかい。非常に弾性に富んでいるので、かなり小さな隙間に入れ

られるように巻き上げることもできるうえに、非常に丈夫であった。大きさは、約16フィート（4.9メートル）四方までの様々な寸法のものがあり、必要とあらばさらに大きいものさえ入手することができる。

ブータンでは現在でも封建制が支配的であるが、優れた工芸品が生産されることは、この封建制によるところが大きいのではないかと思われる。ペンロップやゾンペンは、自らの家来の中に必ず職人たちを抱えている。職人たちは、その生産量に応じて金をもらうのではない。また、義務として時間にしばられて働かされているわけでもなく、忠誠心がないがために働かされているわけでもない。つまり、彼らは彼らのすることに魂を注ぎこんでいるのであり、出来上がったものが素晴らしい個性的な結果を生んだり、見事な仕上がりとなったりしているのである。できあがった工芸品は、たとえ似ていたとしても2つとして同じものはなく、職人たちは個々の工芸品には自身の刻印を残すのである。

ブータンの吊り橋はたいへん興味深いものなのでここに記述しておく価値がある。吊り橋は4～5本の鉄の鎖から出来ているが、その鎖は15～18インチ（38～46センチメートル）の長さの鍛鉄をつなぎあわせたものである。3本の鎖は下方に水平に並ぶように固定され、その上に竹または厚板を載せて通り道とする。残りの鎖は少し距離をおいた高いところに吊るされ、側面の支えの役を果たす。それらと道板とのすき間は、一般に、竹や草を編んだ格子で守られており、動物たちが橋を渡るときに脚を横に踏みはずさないようにしてある。橋幅は広くなく、3～4フィート（91～122センチメートル）を超えることはない。

こうした橋の鎖の多くは非常に古いもので、おそらく数百年も前のものに見えたが、中国人の職人芸であるように思われた。鎖はたいへん丁寧に鍛接されており、錆によって空いたくぼみはほとんどなかった。このほか、ブータンでは新しい鎖の橋も作られていた。

私はもっと長くブータンに滞在したかったのだが、もはや時間が余り残っていなかったので家路へと向かわなければならなかった。魅力にあふれる歓迎をいただいた私の招待主に対して、私は後ろ髪を引かれる思いで別れを告げた。

壮大な峡谷

家路への帰り道の旅行の途中、われわれはタシチョ・ゾンから北方に向かい、ティン・チューの壮大な峡谷を登っていった。ペルグリ・サンプティ・グーツァ僧院（Perugri-sampti-guatsa）とタンゴ僧院（Tango）を通過して、高地の放牧地へと向かったのである。

チィン・チュー（Tchin-chu）の谷は非常に奇怪な形をした巨大な断崖によって縁どられていた。ヨセミテ渓谷（Yosemite Valley）のエル・キャピタン（El Capitano）でさえも、これらの断崖の中ではもっとも小さな怪物にしか見えないだろうと思われるほどの巨大さであった。これらの断崖は水平の層理をもつ堆積岩からなっており、石灰岩、砂岩、濃い青色の粘板岩（slate）もしくは泥板岩（shale）、および珪岩（quartzite）の層を見ることができた。岩塔は頂上から谷底まで劈開面に沿って無数に割れており、そのためにできた亀裂や裂溝には長さ1マイル（1.6キロメートル）以上に達するものがたくさんあるということであった。私が写真に撮った例ではその長さは2マイル（3.2キロメートル）以上にも延び、ティンプーの最良の放牧拠点の一つをなす美しい盆地に達してようやく開けるのであった。

やがて、われわれはガンユル（Gangyul、ゴユ、13,600フィート、4,145メートル）に到着した。この小さな村は、チョモラリ峰（Cho-mo-Lha-ri）の東側の氷河の元の狭い平らな渓谷にある（この氷河は、厳密にはチョモラリ山群の北部に位置するツェリム・カンから落ちる氷河である）。われわれの野営地が準備されている間に、私は馬を走らせて渓谷を2～3マイル（3～5キロメートル）さかのぼった。この地方にあると聞いていた珍しい洞穴を見ようとしたのである。しかし、案内人がわれわれに見せたがっているのはその洞穴などよりも巨大な粘板岩のスレートであることがすぐにわかった。その岩は、ツァンゴ・チュー（Tsango-chu）源流の2つの支流の間にあり、岩の上部には拷問台のような木の軸があった。

ヒゲワシ（Lammergeiers）にむさぼり喰われた

案内人がわれわれに注意深く説明したところでは、これは人間の遺骸が載せられる神聖な場所で

あるという。頭と肩は木の軸に縛りつけられ、身体が動かないように固定される。死体はそのまま放置され、ヒゲワシその他の飢えた鳥や猛獣に食べられるのだという。われわれが聞いたことを偽りなくいえば、鳥たちは潔癖であるために身分の低い者の身体には触ろうとしない。そのため、この谷の中では3家族だけがこのように処置される権利を持っているとのことである。

ティンプー・ゾンペンは、ほんの数年前にその岩盤には彼の娘が載せられたため、その場所には非常に心が痛む記憶があるからといって、私と一緒に行くことを断った。

案内人の一人は、その岩盤の上に寝て、別の一人は火を焚いて煙を起こした。彼らによれば、こうすればきっとビゲワシを巣から誘い出すことができるはずだという。しかしこの計略は失敗し、鳥は現れなかった。この小さな谷にはこの他にも珍しいことがあった。氷河の源頭部までの距離が小さくて傾斜があり、雪に太陽光線が差し込んで引き起こされた雪崩は2つ見ることができたし、さらにいくつかの雪崩の音を聞いたのである。

その主氷河はもっとも美しく、われわれの居る所から天に向かって導かれている幅の広い白雪の階段のように見えた。われわれの上方の断崖には岩の間の穴からほとばしり落ちる綺麗な滝がいくつかあるが、水流は道ばたの小川に達する前に見えなくなっていたので、いったん地下を通って滲み出していたのだろう。これらの滝の興味深い特徴は、太陽光線が強くなったときには滝の大きさも明らかに増して来るということであった。その夜のわれわれの野営は陽気なものであった。われわれは、ブータン人のやるバックギャモンのようなゲームを傍観しながらそのやり方を学び、気楽に時間を過ごしたのである。このゲームには木製のサイコロ2つと様々な長さの小さな棒切れ、一握りの豆を使った。

少し進むとペウ・ラ（Phew-la）すなわちリンシ・ラ（Ling-shi-La）に着き、その峠を越えてチベットに入った。

この時までにわれわれの旅行で使った交通手段には、およそあらゆる種類のものが含まれていた。私が使ったのは、クーリー（人夫）、ゾウ、ラバ、ポニー、ロバ、ヤク、ウシ、荷馬車（carts）、軽馬車（pony-traps）、鉄道および汽船であった。そして、私が雇うことがなかった唯一の利用可能な動物は、チベットの荷物運搬用羊のみであった。

この報告が、読者の興味を引くものであったら幸いである。私の探検そのものが証明しているように、従来、この国はほとんど人に知られていない未知の国であった。そのため、1890年においてすら、あるインドの高官は不当にもこう記していた。「ジャングルに覆われ、ヒルやピプサ・バエ（pipsa-fly）がはびこって熱病の蔓延するこの丘陵部は誰も探検しようとはしない。もっとも進取的なパイオニアに対しても利益は補償されない。冒険はブータンを越えたところにあるようであり、科学においてもブータンには何か特別に探検する価値はない地域であると考えられている。」

この引用をもってとりあえず本稿は終わることになるが、私がかなりの旅行をしたチベットの印象について、ぜひ近いうちに再びナショナル・ジオグラフィック誌の読者に報告できればと希望している。

添付写真の説明文

（　）内の数字は原ページ番号、その右が写真タイトル。説明文の中には、本文が引用されたところもあり、それは「　」で挟んで示した。

(366) ブータン入国後、最初に渡った大きな橋
　松の角材を用いて作られた片持ち梁方式（cantilever principle）の橋である。板葺きの屋根が肋材を風雨から保護し、橋の両端は小要塞で守られている。非常に寒気が厳しく、この激流は一夜にして凍結した。

(367) ゴウツァ（Goutsa）近くの氷瀑
　寒気の厳しさがわかる。この山岳地帯は、海抜13,000フィート（4,000メートル）、樹林限界以上である。周囲の山地斜面では、しばしば野生羊バーラル（Burhel Ovis Nahura）が見られる。前景にはヤクが放牧されている。

(368) ドゥゲ・ゾン（Dug-gye Jong）の城塞
　渓谷に迫り出した尾根の上にあり、素晴らしい景色の中に堂々と立っている。チベット人の襲撃からこのルートを守るために建てられた城である。

(371) ドゥゲ・ゾン

前景に見えているのは私たちの野営地と稲の育つ棚田。海抜9,000フィート（2,740メートル）以上であるが、ここでは稲がよく稔る。

(372) ドゥゲ・ゾン

この写真から建築様式を知ることができる。松の割板で葺いた屋根は張り出しており、外壁は傾斜をもっている。前景の垣は割竹を編んだもの。

(373) ドゥゲ・ゾンの内部の風景

割板を葺いた屋根の押さえに大きな石を使っている。中庭には葺き替えのための長い割板が積まれている。葺き替えは5年毎に行われるが、高所に吹きつける猛烈な風に耐えるよう数トンもの石が載せられる。

(374) ドゥゲ・ゾン

丘の上のゾンから幾つかの丸い塔を結ぶように覆道がある。丸い塔は覆道を防御するためのもので、一番下の塔の下には泉がある。城を包囲された際、城の者たちは覆道を通って水源に達することができる。

(376) サントクペリ（Sang-Tog-Peri）

パロのタクツァン僧院群（Paro-Ta-tshang）の中で最も高所の建物。入り口や周囲、通路には樹が生い茂り、今まで私がブータンで見たものの中では日本の寺院に最も良く似ている。

(378) 修行者の住処

パロのタクツァン僧院（Paro-ta-tshang）へ行く道の途中、最も険しい岩の凹角の通過点にある。ほとんど垂直の岩壁の上にあるが、実はオーバーハングした右側の岩壁の下になっている。左側下部の白い筋は経文・祈祷文が刷られた経文旗を紐に付けたもので、岩の凹角を横切って延びている。

(379) パロのタクツァン僧院本堂の黄金の屋根

上層部分には細かな彫刻が施され、最上部は銅箔。出窓には色が塗られ、渦巻型の宗教的な文様で飾られている。

(380) ゴリナ僧院（Gorina Monastery）

パロ渓谷に迫り出す尾根の上に位置する。周囲にはラマ僧たちの住居があり、経文旗の取り付けられた柱が点々と見える。本堂の右には、柱の先端に円筒形に吊るされた「ギャンツェン（Gyantsin）」と呼ばれる神聖な吊り布が見える。本堂は感じの良いフレスコ画で華やかに飾られていたが、祭壇の周りの掛け布は、私がかつてラサで見たことのある物よりも優れた精巧な真鍮の透かし彫り細工で覆われていた。それと対照的に、祭壇の脇にはけばけばしい緑色の磁器製のオウムが4つ飾られていた。私たちは、写真右手の尾根の下方で祝砲をもって迎えられたが、その大砲の鉄の砲身には皮が巻かれていた。私は、これが中国ーグルカ戦争（the Chinese-Gurkha war）で何度も噂を聞いた皮巻き砲（leather cannon）だろうかと思った。

(382) 立派な仏塔（Chorten、チョルテン）の例

チョルテンと呼ばれる仏塔。ゴリナ僧院の一角にあったもの。経文旗に囲まれている。手前に見えるのは高徳のラマ僧で、彼は数珠を繰りながら祈りを唱えている。この建物の彫刻と飾りは立派で、立体感にあふれていた。

(384) パロ・ゾン（Paro Jong）の良い眺め

前景にあるのは柳の大木。中央にある大きな木が枝垂れイトスギである。私たちの野営地が遠くに見える。

(385) パロ・ゾン

背後の丘の上には防禦用の別の城塞がある。川岸に積まれた石の堤防は、流路を維持し、氾濫を防ぐためのもの。写真でよくわかるように、ゾンの建物の下層は鈍いライトグレーで塗られ、上の方は帯状に茜色で塗られている。

(386) パロ・ゾン

川岸からゾンまでの高さがわかる。川岸の岩の割れ目には小さな寺院が建っている。水源への覆道を守る丸い塔があることに注意。

(387) パ・チュー（Pa-chhu）にかかる橋

この橋を通ってパロ・ゾンに入る。非常に堅牢な造りで、屋根と石造りの建物で保護されている。川を渡る唯一の手段であり、上にある城塞がこれを威圧している。

(388) パロ・ゾンの立派な城郭

右側に跳ね橋があり、そこが唯一の入り口である。

「そのベランダの垂木の間には、大きな石を投げ出すための古い投石器が注意深く保管されていた。」

(389) パロ・ゾンの内部

(390) パロ・ペンロップの私邸

パ・チュー（Pa-chhu）を渡った所にある。ペンロップ（Penlop）と彼の家族が住む。女はゾンに入ることは許されていない。

(391) ブータンの役人たち

座っているのが、一般にパロ・ペンロップ（Paro Penlop)と呼ばれるパロ・ゾンの統治者。

(392) タシチョ・ゾン（Tashi-cho-Jong）

ブータン政府の夏の本部である。

(393) タシチョ・ゾンとティンプー・チュー（Thimbu Chu）に架かる橋

石造りの建物の壁に見えるひび割れは、地震のためにできた。

(395) タシチョ・ゾンの内部

この壁は、俗人たちが占める部分とラマ僧たちのそれとを分離している。背後に見えるのが城郭。手前に居るのは兵士たち。

(396) タシチョ・ゾンの内部。

(397) タシチョ・ゾンの中庭

左側に城郭があり、中央には立派なチョルテンすなわち仏塔がある。

(398) シムトカ・ゾン（Simtoka Jong）

ブータンで最も古いゾン。この領有をめぐっては多くの戦があった。

(399) 富裕な農家

パロ谷の例。家屋はどれも大きく、しっかりと建てられている。

(400) 美しい場所に立地するブータンの村落

背後には高山景観、前景には家屋群。

「私が経験したところでは、人々は、例外なく礼儀正しく、丁寧で、清潔である。この国のあらゆる地方で数多くの家や寺院に入ったが、どれも清潔で整然としていた。多くの家では、床はよく洗われ、磨きあげられていた。そして、彼らが親切に勧めてくれる茶や菓子は、汚れのない清潔な皿に盛られていた。」

(401) トユ状にくりぬいた灌漑用の丸太

トユ状にくりぬいた木の幹を使い、川をまたいで水を流している。ブータン人の灌漑技術は偉大で、丘の斜面に沿って何マイルもの長さの水路をひく。

(403) ハ（Hah）の村

ブータンの木造家屋の良い標本。

(404) プナカ（Poonakha）

前景に見えているのはモ・チュー（Mo-chhu）に架かる橋。西面からの唯一の入り口である。大砲と照準付きの火器がなかった時代には、非常に強力な戦略上の位置を占めていた。現在では四方の丘の上から威圧することもできよう。

(406) プナカでの公式謁見（Durbar）

右から左へ、ティンプー・ゾンペン（Thimbu Jongpen)、スカーフをかけて座るウゲン卿（Sir Ugyen)、彼の後ろにウゲン・ドルジ（Ugen Dorji)、果物の供物で覆われた祭壇の前に座るのは政府学堂（Ta-tshang、ダツァン）の大僧正、著者、レンニク少佐（Major Rennick)、ポール氏（Mr.Paul)。各人の前の果物皿と壮大な絹の吊り布やカバーに注意。

(407) 公式謁見場の風景

公式謁見の大広間を見下ろしたもの。身廊の中央には贈り物の大きな山がある。役人たちは贈り主の名前を書き記している。左には政府学堂のラマ僧たちが豪華な長衣を着て座っている。四方にはきらびやかな錦の絹の吊り布がかけられている。政府学堂のラマ僧たちの上には、特に美しい丸い筒状の幟が列をなして吊られている。

(408) プナカ・ゾンの中庭

公式謁見の後。華やかに飾られたラバとポニー。それぞれに馬子が付いている。

(410) ブータンの役人たち

公式謁見の後、著者の野営地へ向かうところ。左の３人が、パロ・ペンロップ、ティンプー・ゾンペン、ウゲン卿。

(411) ブータンの兵士たち

著者の野営地へ向かう役人たちに従って歩いているところ。各人とも、派手な色に染められた山繭の絹（Tussore Silk、タッ

サー・シルク）の衣服を着、鉄製のヘルメットをかぶり、銀鞘の刀を下げている。

(412) ウゲン卿と彼の顧問官たち

顧問官たちは、明るい色の絹の長衣をつけ、各々の職階に応じた深紅色のショールをかけている。旗手は華美な縞の着物（boku）を着て、戦士は、美しく磨き上げられ、様々な色の飾りの付いた鋼鉄のヘルメット、皮の盾、刀を身に付けていた。射手は弓と矢を持ち、砲手は様々の奇妙な武器を持っていた。その他にも多くの者がいたが、みな風変わりで絵に描いたような着物を着ていた。左から右へ、プナカ・ゾンペン、ティンプー・ゾンペン、ウゲン卿、シュン・ドニェル（Zung Donyer）、テブ・ズィンペン（Deb Zimpon）、最後に立っているのがウゲン・ドルジ。

(413) 著者の野営地に集まった人々

プナカにて。トンサ・ペンロップと役人たちは、私的に見せた幻燈器（magic lantern）に特別の興味を示し、城の中でもう一度映すことを望んだ。おかげで、それから幾晩か、私たちは大変な群集に囲まれることになった。人数は少なくとも千人はいたに違いない。何度か小耳に挟んだところでは、人々はこの出し物に大変な興味を持ったらしい。私は、自分で撮ったチベットの写真のスライドのほかにもインドとヨーロッパのそれをたくさん持っていた。私たちは、スクリーンの両側の観客が見れるようにスクリーンを濡らしたのだった。写真中央の4人は、左から右へ、プナカ・ゾンペン、ティンプー・ゾンペン、ウゲン卿、パロ・ペンロップとその息子。さらに、デプ・ズィンペン、右にウゲン・ドルジ。

(414) プナカでの施し

公式謁見後、私たちは野営地の外で近隣の貧者たちに施し物を配った。千人以上の人が現れたが、大変静かで秩序正しい群集であり、皆自分の順番が来るのを非常に忍耐強く待っていた。私は彼らを二列に座らせたうえで、レンニク（Rennick）、キャンベル（Campbell）両氏に頼んで1人4アンナずつの小銭を配った。両親が素早くコインをつかんだにも拘らず、赤ん坊にもその両手をさし出させるのであった。

(415) タロ僧院のラマ僧

写真中央の人。大きな甲状腺腫がある。この病気はヒマラヤ全体に広がっており、雪溶けの水を飲むためになると信じられている。

(416) 故シャブドゥン・リンポチェ（Shabdung Rimpoche）の家

タロ僧院にある。庇の下のフレスコ画と彫刻は立派で、全ての装飾が美しい。鐘はブータンで鋳造されたもの。

(417) ターキン（Takin, Budorcas Taxicolor Whitei）

チュンビで撮影した珍しい野生動物。このターキンは、インドへの移送が企てられたが、残念ながら翌日には死んでいた。トリカブトを食べたためと思われる。後に、私は他の標本を手に入れることに成功し、それは今ロンドンの動物園にいる。

(418) ウォンディポダン・ゾン（Angdphodong Jong）

プナカの下流約10マイル（16キロメートル）の所、モ・チューの上にある。

(420) トンサ・ゾン（Tongsa Jong）全景

水が張られた右手の水田では、稲の豊作を祈る儀式として男と女の戦いが行われた。

(421) トンサ・ゾン

離れた城塞と棚田、灌漑用の木のパイプが写っている。

(422) (無題。流水で動くマニ車の入った建物の写真)

「トンサ・ゾン東面の城壁の下、渓谷の中には流水で動くマニ車の入った建物がある。その中には2組のマニ車があったが、それぞれ、車軸には3つのマニ（mani）すなわち経文の入った円筒が取り付けられており、一番小さい筒が上になるように重ねられていた。ブータンにいる間、このような流水で動く仕掛けのマニ車はしばしば見かけたが、そのほとんどは絵に描いたように朽ち果てていて、まだちゃんと動いているものはごく僅かであった。」

(423) トンサ・ゾンへ入る門の一つ

「これは微笑ましい程に容易な祈祷の方法であり、巨大なマニ車も幾つか建てられていた。シッキム、ラチェン渓谷（Lachen）のラムテン（Lamteng）にあったものは、4トン以上もの経文紙が入っており、高さ9フィート（2.7メートル）、直径4.5フィート（1.37メートル）にも及ぶものであった。

(424) トンサ・ゾンのラマ僧と見習い僧たち

彼らの顔つきを見ていると、奇妙な混合型の顔が混じっている。かつて、平原地帯に頻繁に侵入していた頃に、多くの男女を捕虜として連れ帰ったためなのであろう。甲状腺腫の者が2人見える。

(425) トンサ・ゾンに集まった女たち

ほとんどの者が数珠を繰るかマニ車を廻してお経を唱えている。中には両方を操っている者もある。窓にかけられたカーテンに注意。

(426) ジャカにあるウゲン卿の姉妹の家

良い私邸の例である。これらは非常に大きい宿泊施設で、多くの家来・召使を収容している。

(427) 古い着物を着た織子たち

この着物は現在では着られていない。

(429) ブータン国王、ウゲン・ワンチュック卿

インド帝国中級勲章をかけて邸宅の玄関に立つ姿。この勲章は彼が王位につくよりも前に英国政府から贈られたもの。

(430) 断崖に建てられた僧院

この僧院はパロのタクツァン僧院群の一角をなす。海抜数千フィートもの高さの垂直の断崖の途中に、とまり木にとまった様に座を占めている。写真前景の道の途中に、経文旗と仏塔があるが、そこから先、道はほとんど通過不能な岩の凹角へと下る。そこは堅い岩をくり貫いたような急な石段で、ほんのちょっとでも足を滑らすとまっさかさまに2千フィート（600メートル）は墜落してしまいそうな所である。

(431) あるゾンの内部

(432) トンサ・ゾン

絵に描いたように美しい、ブータン国王の公邸でもある城である。

(433) トンサ・ゾンの内部

「城塞は素晴らしい建物群で構成されていた。数多くの中庭、寺院、住居があり、全体でおよそ3,000人のラマ僧と俗人を収容しているが、最大では6,000人は収容できるだろう。」

美しい彫刻を施された窓や、奇妙な庇をもつ屋根に注意。

(434) ブータンの王室の人々

階段の一番上の段に立っているのが国王。正装でなく気楽な私服を着ている。側に居るのが彼の姉妹とその娘2人。国王の右に居るのは彼の甥の一人。前方の3人の少女は女中たちで、その階級の者が着ける現代の服装をしている。

(435) 国王の歌唱少女団

「招待主たちのおかげで、私たちは最高に楽しく思いやりに満ちた歓待を受けた。私たちが快適に過ごせるようにと、ありとあらゆる事が行われた。野営地が準備され、道が修理され、私たちの住む家までが建てられた。それほどのことが実際にできる招待主は、彼以外にはなかったであろう。私たち一行がトンサ・ゾンの城塞に近づくと、歌を歌う少女たちが、ほとんど垂直に近い接近路の下で出迎えてくれ、歌を歌いながら私たちを城へと導いた。」

(436) 最後のデプ・ラジャとなった僧侶

かつて、デプ・ラジャはこの国の俗界の長であった。また、ダルマ・ラジャが空位の時には僧界の長でもあった。後ろには美しく刺繍された旗幟、左には冠とスカーフ、テーブルの上には職業用具である太鼓と鐘が見える。前方にある刺繍された布地は、華やかに色どられたアップリケの作品。

(437) 国王の宮殿の内部

ジャカ・ゾン（Byagha Jong）と呼ばれるこの城には、現国王と家族が住んでいる。写真からは、ブータンの建築物がいかに美しく、また興味深いものであるかがわかるだろう。後方に立っているのは著者の到着を歓迎した音楽隊である。中庭の中央には、木の幹をくりぬいた浴槽が3つおかれてい

る。ここが王室の湯殿である。

(438) 中庭の典型例

ブータン人たちは実に巧みな建築家であり、木の加工品は常に高級な美しさを持っている。ドア、窓、羽根板には、彼らのもつ技術が完璧に施されている。建物は3、4階建てで、中庭に向かってバルコニーが設けられている。装飾物は木の彫刻で、一般に彩色されている。鉄は一切使われておらず、ドアは精巧に組み立てられた木製の蝶番で固定されていた。

(441) 仮面舞踊の踊り手たち

ブータン人はチベット人と同じく仏教徒である。写真は、トンサ・ゾンでラマ僧つまり修道僧たちが宗教的な踊りを披露しているところ。しばしば悪魔の踊りと呼ばれているが、それは誤りである。踊り手の被っている仮面は悪魔ではなく、善や悪その他の架空の人格をあらわしており、中世ヨーロッパの奇跡劇に似ている。

(442) ブータン式の橋

この橋は、ウォンディ・ポダン（Angdu-pho-dong）の城の下方にあって、130フィート（40メートル）の長さがある。現地人の手になる橋のよい標本だが、大変古いものでもある。というのも、120年前にブータンを訪れた英国人の一人はこの場所で橋をスケッチしたが、それに描かれた構造と現在のそれとは驚くほど似ていたのである。

(443) ウォンディ・ポダン・ゾン

ブータンで見る全ての城塞と同じく、この城の内部には一連の中庭がある。写真は、その中庭の一つとそれに面した建物で、小役人たちに割当てられたスペースである。前景には家畜が見えるが、彼らは家畜とも仲良く生活している。

(444) 豪華な絹の着物を纏ったラマ僧たち

トンサ・ゾンにて。この3人のラマ僧は「仮面舞踊」を補佐していたが、宗教的な役目のためこのように正装している。ラマというのは北方の仏教会に属する僧侶を指す名前で、チベットのラサにいるダライ・ラマとは宗教的には同盟関係にある。

(446) ジャカにあるウゲン卿の家の中庭

織子たちも写っている。右の階上には機織りの部屋がある。

(447) ウゲン卿の姉妹の夏の住居

ジャカの北、約4マイル（6.4キロメートル）のサンガチョリン（Sangachoiling）にある。

(448) ラサの医者と知られている老ラマ僧

ポーズをとった奇人。この写真を撮る時に、人間の大腿骨から作った笛と頭蓋骨から作った太鼓を持ちあげて見せた。

(449) ティン・チュー峡谷（Tchin-chu）の眺め

前景にはヤクとラバに乗る姿がある。ブータン人には奇妙な習慣があり、特に困難な旅行に出る時にはラバに卵を食べさせる。

(450) 従者に食事を与える

野営地に到着後、従者に食事を与えているところ。黒いヤクの毛で織ったテントが多いが、刺繍のある白いテントは長（the head man）のものである。

(451) ボド・ラ峠（Bod-la）を仰ぐ

経文旗で囲まれた小さな寺院。前景に見えるのは私たちの人夫と荷物。

(452) カルカッタに集まった人々

ウェールズの皇太子殿下御訪問時の写真。左から右へ、ブータン兵、外務省のホランド氏（R.E.Holland）、殿下御訪問の間特命任務にあった第93d高地連隊のヒスロップ大尉（Captain Hyslop, 93d Highlanders）、ウゲン卿、ウゲン・ドルジ、著者、ライ族のロブサン・チェデン・サヒブ（Rai Lobzang Chuden Sahib）、ジェルン・デワン（Jerung Dewan）、シッキム国王殿下（H.H. the Maharaja of Sikkim）、バルミアク・カジ（Barmiak Kazi）、シッキム王妃殿下、ブータン兵、シッキム兵。

原注

1）私のブータンへの最初の旅行は1905年末のことで、チュンビ渓谷（Chumbi）からアモ・チュー渓谷（Am-mo-chu）を下ってインド平原へ出た。その翌年の春、私は、トン

サ・ペンロップ（Tongsa Penlop）にインド帝国中級勲爵士（K.C.I.E.）の勲章を授与するためにインド政府より派遣された。この時のルートは、私の本拠地であるシッキム（Sikkim）のガントク（Gangtok）の公邸から、ナトゥ・ラ峠（Natu-la）を越え、ハ（Hah）、パロ（Paro）、タシチョ・ゾン（Tashi-cho-jong）を経由してプナカ（Poonakha）へ至り、そこからさらにトンサ（Tongsa）とジャカ（Byagha、ブムタン）を訪れた。また、タシチョ・ゾンからの帰路はティン・チュー渓谷（Tchin-chu）を北に遡るルートをとってチベット（Tibet）へ出た。

別の機会に、私は英領インドとブータンの国境線沿いを行進した。ドランガ（Dorunga）からダングナ・チュー（Dangna-chu）を横切ってカンガ（Kanga）へ行き、そこからクル川（Kuru River）を遡ってみた。さらに、それと同じ年に、私はデワンギリ（Dewangiri）からチュンカル（Chungkar）、タシガン（Tashi-gong）、タシヤンツィ（Tashiyangtsi）を経由し、ドン・ラ（Dong-la）を越えてルンツィ（Lhuntsi）へ出て、パンカ（Pangkha）、シンギ・ゾン（Singhi-jong）を経たのち、ボド・ラ（Bad-la, Bod-la）を越えてチベットに入った。

1907年には、インド政府に対し、トンサ・ペンロップであるウゲン・ワンチュック卿（Sir Ugyen Wang-chuk, K.C.I.E.）がギャルポ（gyalpo）つまりブータンの国王（マハラジャ）に就任するという公式の通知があったが、それには、私自身の臨席を強く求める招待状も添えられていた。そして、喜ばしいことに、私はインド政府を代表してその儀式に出席する使節団の長を任されることになった。使節団は、チュンビ渓谷のパリ（Phari）からテモ・ラ（Temo-la）を越えてパロに至り、以前通ったことのある道を辿ってプナカ（Poonakha）に到着した。そこで私は護衛と友人たちを見送り、帰路はビテ・ゾン（Bite Jong）とダガナ・ゾン（Dungna-Jong）を経由する未知のルートを通ってインド平原のジャイガオン（Jaigoan）に出た。

訳注

1）K.C.S.I.とK.C.I.E.は、英国側が与えた勲位で、それぞれ、Knight Commander of the Star of India（インド帝国星勲爵士）、Knight Commander of the Indian Empire（インド帝国中級勲爵士）である。なお、著者ホワイトの名に付されているC.I.E.は、Companion of the Indian Empire（インド帝国下級勲爵士）を意味する。

2）ここでウゲン・カジ（Ugyen Kazi）と記された同行者は、当時カリンポンに住んで名声の高かったブータン政府代表、ウゲン・ドルジ（Ugyen Dorji）のことである。カジ（Kazi）とは、ネパール語圏において、徴税官などの高官に与えられた名称であった。ウゲン・ドルジは、初代国王となるウゲン・ワンチュックのよい補佐役であったとともに、インド政府にも雇われて給料をもらい、その対チベット交渉の仲介者としても働いていた。その功績を認めたホワイトは、彼にライ・バハドゥール（Rai Bahadur）という称号を与えた。そのため、ホワイトの著作では、Rai Ugyen Kazi Bahadur、Rai Ugyen Dorji Bahadurなどという名前でも記されている。

3）ブータン教育省が出版した歴史書（Bikrama Jit Haslat, History of Bhutan, Education Department, Thimphu, Bhutan, 1980, p.51.）などに記されているように、現在では、パロ・ゾン（正確にはリンチェン・プン・ゾン）は、1646年頃、すなわち17世紀の中頃にシャブドゥン・ガワン・ナムゲルが建てたものとされている。ただし、それ以前にも別のラマが建てた小さなゾンはあったようである。

4）デプ・ラジャとは、ペンロップやゾンペン（県知事）という地方統治者の上に立つ摂政である。17世紀にブータンを統一したシャブドゥン・ガワン・ナムゲルの死後、ブータンでは聖界・僧界の長である国家元首ダルマ・ラジャ（法王）と、俗界の長であるデプ・ラジャ（摂政王）による二頭支配体制が続いていた。ダルマ・ラジャは転生によって選ばれたが、デプ・ラジャは有力者の間の選挙で選ばれていた。ダルマ・ラジャはもちろん僧侶であったが、歴代デプ・ラジャの多くも僧侶

であった。中世のブータンでは、デプ・ラジャやペンロップの地位をめぐる争いが絶えず、デプ・ラジャの在位年数は平均して4～5年程度で、交代が繰り返されていた。ダルマ・ラジャ及びデプ・ラジャはインド風の呼称であり、ブータン語では、それぞれシャブドゥン・トゥトゥル（Zhabdrung Thutul）、ドゥルック・デシ（Druk Desi）と呼ばれた。

5）チョーレ・トゥルク（Chole Tulku）とは、17世紀にブータンを統一したチベット仏教ドゥク派の高僧、シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルが転生した化身の1つである。シャブドゥンの化身には身・口・意を引いた3つの系譜があり、身の系譜は跡絶えていたが、口はチョーレ・トゥルク、意はダルマ・ラジャ（シャブドゥン・トゥトゥル）として継承されていた。本稿に示されるホワイトの第2回目のブータン訪問時には、このチョーレ・トゥルクであったイシ・ゴドゥップ（Chholay Yeshey Ngodub）がデプ・ラジャの地位に就いていたが、数年前に亡くなったダルマ・ラジャの新しい化身の認定に問題が生じていたため、彼はダルマ・ラジャの職務をも兼務していた。一方で、デプ・ラジャの本来の職務である行政は、実質上トンサ・ペンロップに牛耳られていたのであった。本稿に記された勲章授与の翌年（1907年）には、議会での決議とデプ・ラジャ自身の同意によって、デプ・ラジャの制度は廃止されると同時に、ウゲン卿を初代国王（ギャルポ）とする現王政が成立して、俗界の支配権はデプ・ラジャから国王へと移ることになる。

訳者あとがき

本稿の著者ジョン・クロード・ホワイトは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、20年以上にわたってシッキムのガントクを拠点に活動した政務官で、英国勢力下のシッキム、ブータン、およびチベットを担当していた。在任中の記録は、『シッキムとブータン』（J.Claude White, C.I.E., Sikhim & Bhutan: twenty-one years on the north-east frontier, 1887-1908, London, 1909.）という著書にも著わされている。（彼の後任は、チベット学者でダライ・ラマ一三世との親交を深めたことで知られるチャールス・ベルである。）英領インド政府は、ブータンの現世襲王制が成立する際にはその後押しをしたが、本文にあるように、著者ホワイトは初代国王ウゲンワンチュックと親密な関係を結び、インド政府の代表としてブータン側に接したのであった。

本稿の著者ホワイトは合計5回のブータン旅行を行ったようである。順に整理すれば、（1）アモ・チュー渓谷（チュンビからアモ・チュー渓谷の下降、1905年）、（2）西部および中央ブータン（ナトゥ・ラ－パロ・ティンプー－プナカ－トンサ－ブムタン－ティンプー－リンシ－ペゥ・ラ、1905年末から1906年）、（3）東部ブータン（ドランガ－ダングナ・チュー－カンガ－クル・チュー、1907年）、（4）東部ブータンからチベット（デワンギリ－チュンカル－タシガン－タシヤンツィ－ドン・ラ－ルンツィ－パンカ－シンギ・ゾン－ボド・ラ、1907年）、（5）西部ブータンから南部ブータン（チュンビ－パリ－パロ－プナカ－パロ－ビテ－ダガナ－ジャイガオン、1907年末から1908年）となる。

このうち、第2回目の旅行においてK.C.I.E.（インド帝国中級勲爵士）、第5回目の旅行においてK.C.S.I.（インド帝国星勲爵士）の勲章が、著者ホワイトを通じてインド政府からウゲン・ワンチュックに授与された。本稿に記された勲章授与は第2回目の旅行の時のもので、ヤングハズバンドに率いられたチベット遠征（1904年）においてウゲン卿が果たした功績を顕彰するために行われた。こののち、ウゲン・ワンチュックは1907年12月に王位に就くことになる。（なお、さらに後の1922年、最高の勲章であるG.C.I.E.（Grand Cross of the Indian Empire、インド帝国大十字章）がF.M.Baileyを通じてブムタンにおいて授与される。）

本稿の価値を、原著に添付された多数の貴重な写真のほかにあげるとすれば、17世紀のシャブドゥン以来の政治体制が20世紀初頭に至って現王政へと移行する時期の一史料である点にあろう。それは、戦乱の絶えなかった長い時代が終焉して国家統一が再び実現する時代であったと同時に、ダルマ・ラジャ（法王）、デプ・ラジャ（摂政王）を中心とした僧界主導の権力が、俗人主導の権力

へと移行する時代でもあった。初代および第2代国王は、30年ほどの時間をかけてこれを完成させるのである。

以下は、翻訳に際して注意した、あるいは気になった点である。

著者による現地語のアルファベット表記は、現在一般的な英語表記の綴りとはしばしば異なっている。ゾン（Dzong）をジョン（Jong）、プナカ（Punakha）をプーナカ（Poonakha）と綴る例などである。しかも、マルワ（murwah, murwa, marwa）、チュー（Chu、Chhu）、ボド・ラ（Bodo la, Bado la）、ズィンペン（Zimpen, Zimpon）、ギャンツェン（Gyantsen, Gyantsin）、タッサー・シルク（Tussore, Tussar）などのように、綴りが統一されていないものも少なくなかった。訳文の中では原綴りは訳者による用語説明とともに（　）内に記しておいたが、これらの現地語をカタカナ表記するにあたっては、気のついた範囲で、現在の邦文文献でより一般的な表現を選定・採用した。

本稿のタイトルの訳し方には少々苦慮した。とりあえずは「空中楼閣」という固定化した訳語をあてておいたが、「空飛ぶ城塞」とか「そびえる城塞」とでもしたほうが、あるいは適当だったのかもしれない。

なお、文中にはTa-tshangという綴りの語が何度も出てくるが、この語はパロのタクツァン僧院を意味する場合（Tak-tsang）と、僧侶組織であるダツァン（Dra-tsang、学堂）を指す場合とがあるようであった。原著者が両者を混同していたのかどうか、この文献だけからでは断定しきれないところもあるが、旧友カルマ・ドルジ氏のご教示により、少なくともこの訳出においては混同を避けることができた。

ダツァンは大学でいえば学部に相当するもので、長である大僧正を中心に修行や寝食を共にする僧侶集団がその単位となる。ブータン政府は宗派の上ではドゥク派であるので、文中に出てくる、国内各地のゾンなどにあるダツァンは、中央政府が各々の地方にもつ政府学堂（シュン・ダツァン）となっている。ここの僧侶たちはドゥク派に属し、一種の公務員ともいいうることになる。しかし、ニンマ派信者の多い東部ブータンなどでは、ゾンの外にはドゥク派の僧院がないところも多い。つまり、行政的には私的な僧院組織という扱いを受けるニンマ派の僧院や学堂があって地元の民衆の信仰にこたえているなかで、ゾンの中だけに浮島のように政府組織としてのドゥク派の学堂がある